當世風俗通

いづみ乃梧左

梓元乃應雲
豊國画

明治五年
拾月号

味覺の秋

秋趣の情景都下一

風味・情緒・設備

斷然斯界の第一位

名代割烹 電氣

天王寺公園

Tennoji Park, Osaka.

電話戎(自)一三三四番(至)一三三七番

御芝居歸りには打揃ふて
お坐席で是非御會食を

喜久屋食堂

道頓堀戎ばし北詰

支店
大阪支店　北新地裏町
京都支店　木屋町ドングリ橋

道頓堀

昭和五年十月號　第五年第四十九輯

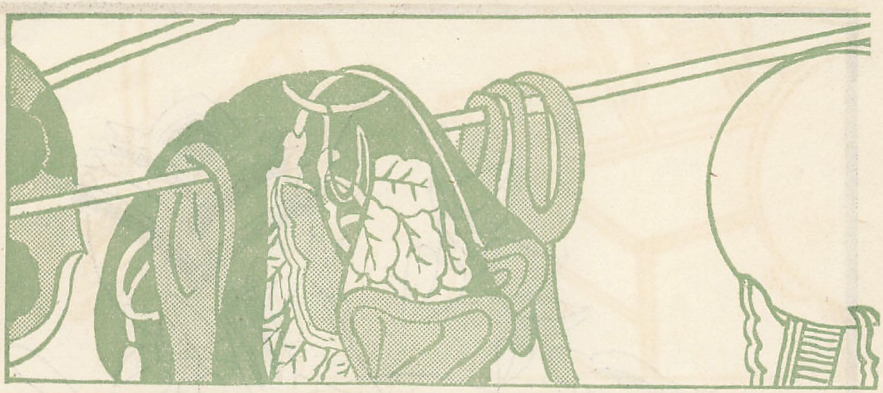
◇表紙　錦繪十數度刷（いがみの權太）……

口繪

◆中座關西大歌舞伎◇「義經千本櫻」鴈治郎のいがみの權太◇「經島娘生贄」中車の平清盛、魁車の娘小枝◇「義經千本櫻」我童の娘お里、福助の三位中將維盛、市藏の彌左衛門◇「すしやのグラフ」鴈治郎のいがみの權太、福助の維盛、魁車の若葉内侍、大吉の女房お米、市藏の彌左衛門、中車の梶原景時、成一の六代君、我童の娘お里◇「五大力グラフ」鴈治郎の源五兵衛、福助の菊野、中車の三五兵衛、魁車のお市、長三郎の萬太郎◇「春色五大力」中車の三五兵衛、壽三郎の八右衛門、鴈治郎の源五兵衛◇「連獅子」三津五郎の親獅子、長三郎の子獅子◆浪花座◇「天晴れウオング」早川のウオング、水谷のフアンニイ、井上のナ・ホン・フア、「紙風船」伊志井の夫、水谷の妻◇「富岡先生」井上の富岡先生、水谷の娘お梅、小堀の江藤侯爵◆角座「南方戰線に躍る」島田の王鶴人、久松の桃小寶◇「五文叩き」高木の門弟熊吉、中井の劍客梁川、秋月の魚屋虎松◇「間新六」久松のお瀧、辰見の新六◇「南方戰線に躍る」中井の馮玉祥、島田の王鶴人、山路の何玉鳳◆樂天地◇「謎の死體」「捕吏の家」の舞臺面◆文樂座◇「玉藻前旭袂」「桂川連理柵」「關取千兩織」「競伊勢物語」の各舞臺面◆十月巡業陣◇「鬼あざみ」林長二郎「三人の母」石河薫

◇十月の中座

五大力漫錄（鴈治郎と並木五瓶）……富田泰彦（二）
昔語五大力……高安吸江（四）
權太演出考……高谷伸（一五）
經島解說……森ほのほ（一〇）
わが鴈治郎讃美說……倉田敬明（二〇）
權太讃頌……入江來布（一九）



芝居見物　春色五大力（中座東西大歌舞伎上場）……（七）
天晴ウオング（浪花座十月興行上場）……（二九）
新　六（角座新國劇上場）……（五〇）
◇母國の舞臺に立つまで……早川雪洲（二六）
◇浪花座出演に就いて……水谷八重子（三八）
◇富岡先生雜話……井上正夫（三三）
◇ウオングの舞臺裝置と照明に就いて……遠山靜雄（二四）
◇紙風船上演に際して……園地公功（三六）
鸚鵡石　經島娘生贄……（一二）
鵜　義經千本櫻（すしやの場）……（一八）
連獅子……（二三）
◇文樂人形を語る……西尾福三郎（四〇）
◇玉藻前曦袂……（十月興行上場床本）……（四二）
新國劇　B級蹶起の秋……俵藤丈夫（四六）
無題斷想……竹田敏彥（四八）
□芝居ニユース……（五四）
□劇壇往來……（五六）
△挿繪カット……田中滿彥
△編輯後記……住田冬和（五八）

清楚な淡化粧に

新御園水白粉

純白・肌色・櫻色

各五十錢

東京 伊東胡蝶園 本舗

大阪市東區農人橋二丁目十二番地

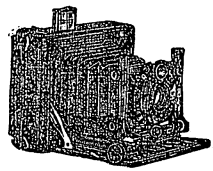
合名會社

大阪橋本組

電話 東（特長一五八〇番 特長一一五八一番 二六五五番）

支店 東京市麹町區丸ノ内二丁目六番地
電話丸ノ内特長四七八〇・四七八一番

支店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）

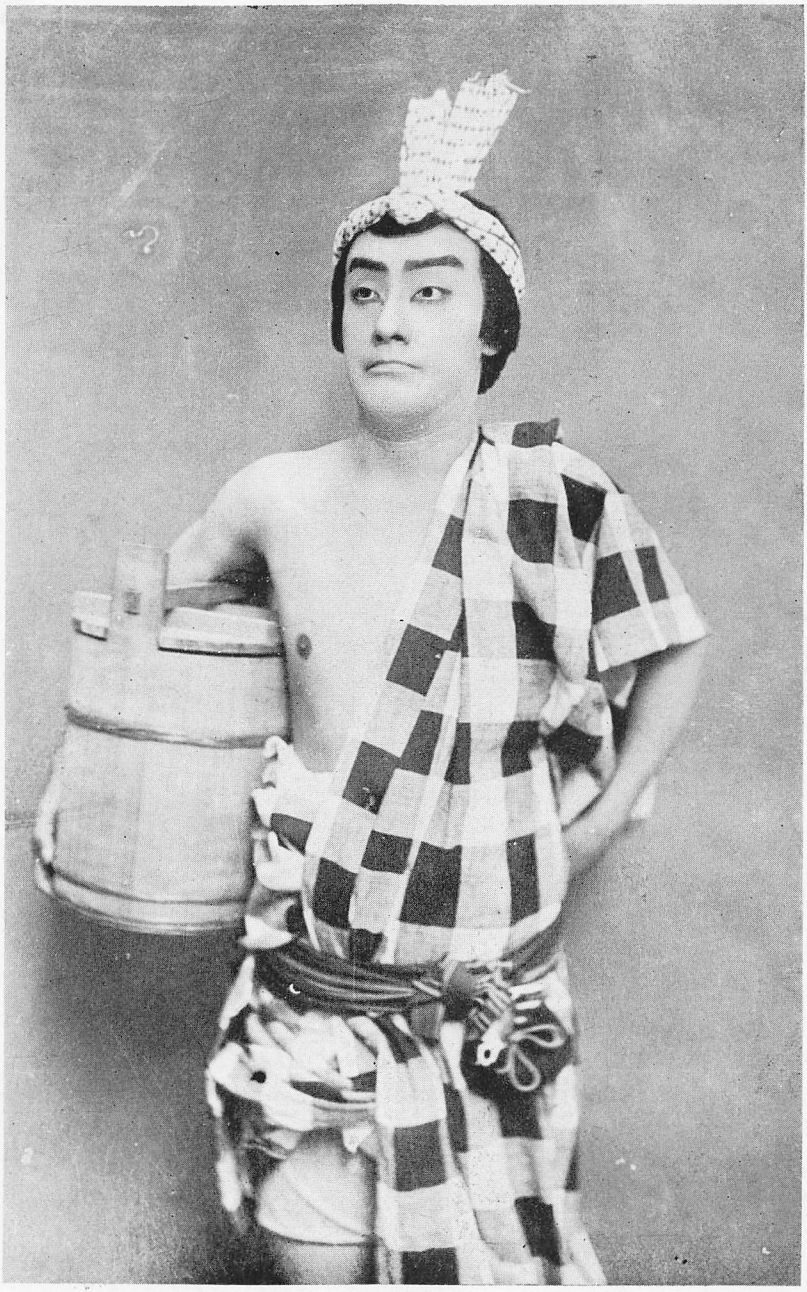


面影殘す繪姿ホ
去りし昔の懷ばれて……

肖像、風景、其他凡有る物を
寫眞や小型映画に殘したいと
思召しの時は是非共
長堀橋は南詰 小西六へ……

寫眞機は
リリーカメラ　小型活動
パールカメラ　寫眞機械
アイデアカメラ　各種在庫
バーレットカメラ

（カタログ進呈）



中座十月・義經千本櫻壽しやの場

いがみの權太・中村鴈治郎

中座十月興行 〝經島娘生贄〟

大詰　兵庫岬の濱邊舞臺面

娘小枝魁車

平清盛入道淨海　中車

十月・中座

義經千本櫻

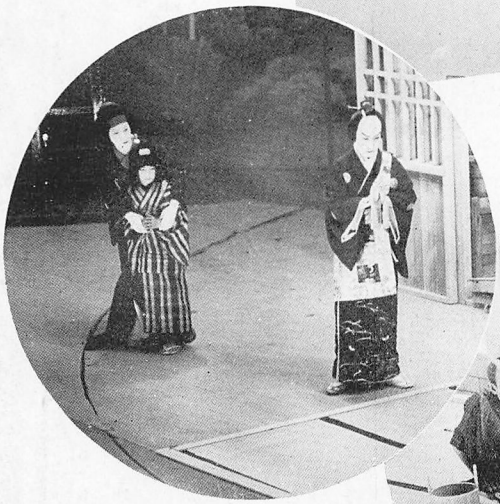
壽しやの場

娘お里　我童

下男彌助
實は三位中將維盛　福助

彌左衞門　市藏

いがみの權太　鷹治郎
彌助實は維盛　福助
若葉内侍　魁車
女房お米　大吉
親彌左衞門　市蔵
梶原景時　中車
六代君　成一
娘お里　我童



美味・滋養・重寶

牛肉寶來煮

高天一碧

爽！快！

山です　野です

海です　川です

家庭に　物見に

行くとして可なるものゝ名は寶來煮

毎戸に一罐御常備あれとすゝめます

發賣元

株式會社 松下商店

大阪市高麗橋二

松下商店京都出張所

京都醒ヶ井五條上ル

舞臺照明裝置及設計

米國ユニヴアーサル電氣舞臺照明會社
同 ヂスプレー電氣舞臺照明會社
同 センチユリー電氣舞臺照明會社

製品

大阪市東區京橋前ノ町三

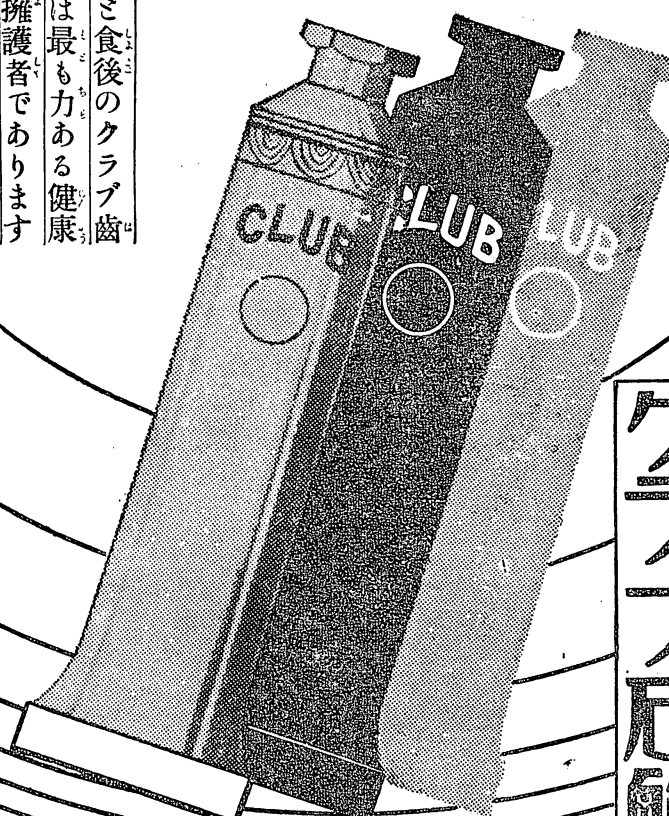
バグナル株式會社

電話東(94)五二〇一番
五二〇二番

効力第一の

虫歯ブラク

朝と食後のクラブ歯磨は最も力ある健康の擁護者であります



最良の石鹸

クラブ石鹸

理想的生命保險

◆生命保險の實質を定むる我社の新保險約款は、其内容に於て優良無比、殆んど無條件の加入者本位のものであります。

◆最高率の積立金と巨額の任意資産は優秀なる資産を構成し、金解禁後の株式暴落時代に於て尚且つ巨額の評價差益を持つて居ります。

◆合理的低保險料を以て最も巨額の加入者配當を實行し得る堅實なる基礎を持つて居ります。

最優　最大

日本生命

大阪市東區今橋四ノ目

勝間源五兵衛　鳳治郎
藝者　菊野　福助
笹野三五兵衛　中車
女房　お市　魁車

源五兵衛　鳳治郎・菊野　福助・お市　魁車

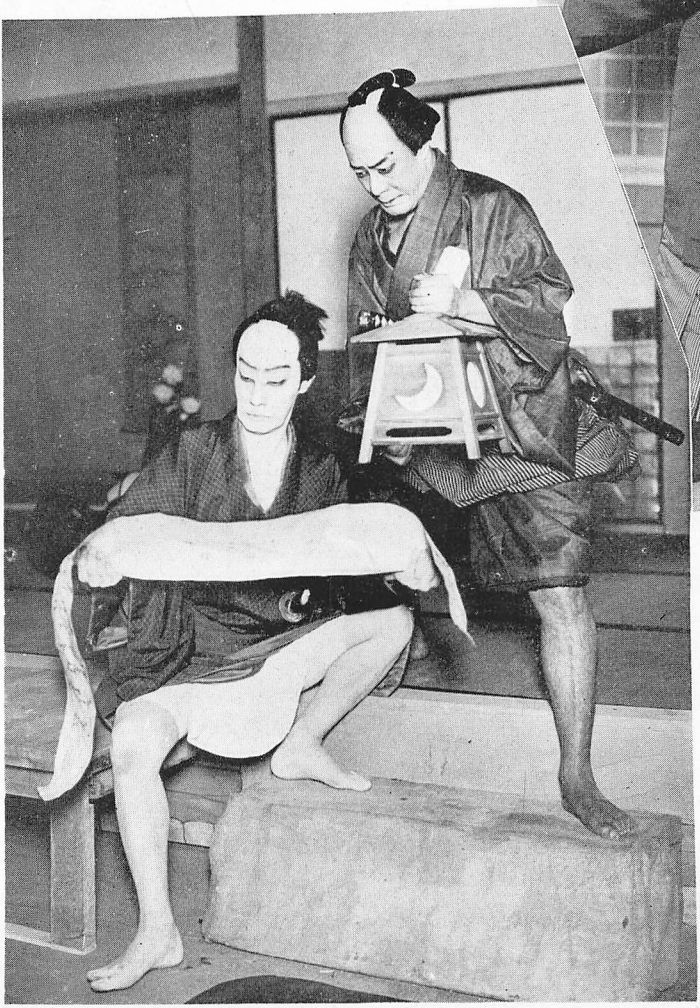
源五兵衛　鳳治郎
菊野　福助

千島萬太郎　長三郎

菊野　福助・三五兵衛　中車・源五兵衛　鳳治郎

十月中座

春色五大力



笹野三五兵衛　中　車

若黛八右衛門　壽三郎

勝間源五兵衛　鷹治郎

親獅子の精　坂東三津五郎
子獅子の精　林　長三郎

連獅子

十月・中座

浪花座十月・天晴れウオンゲ

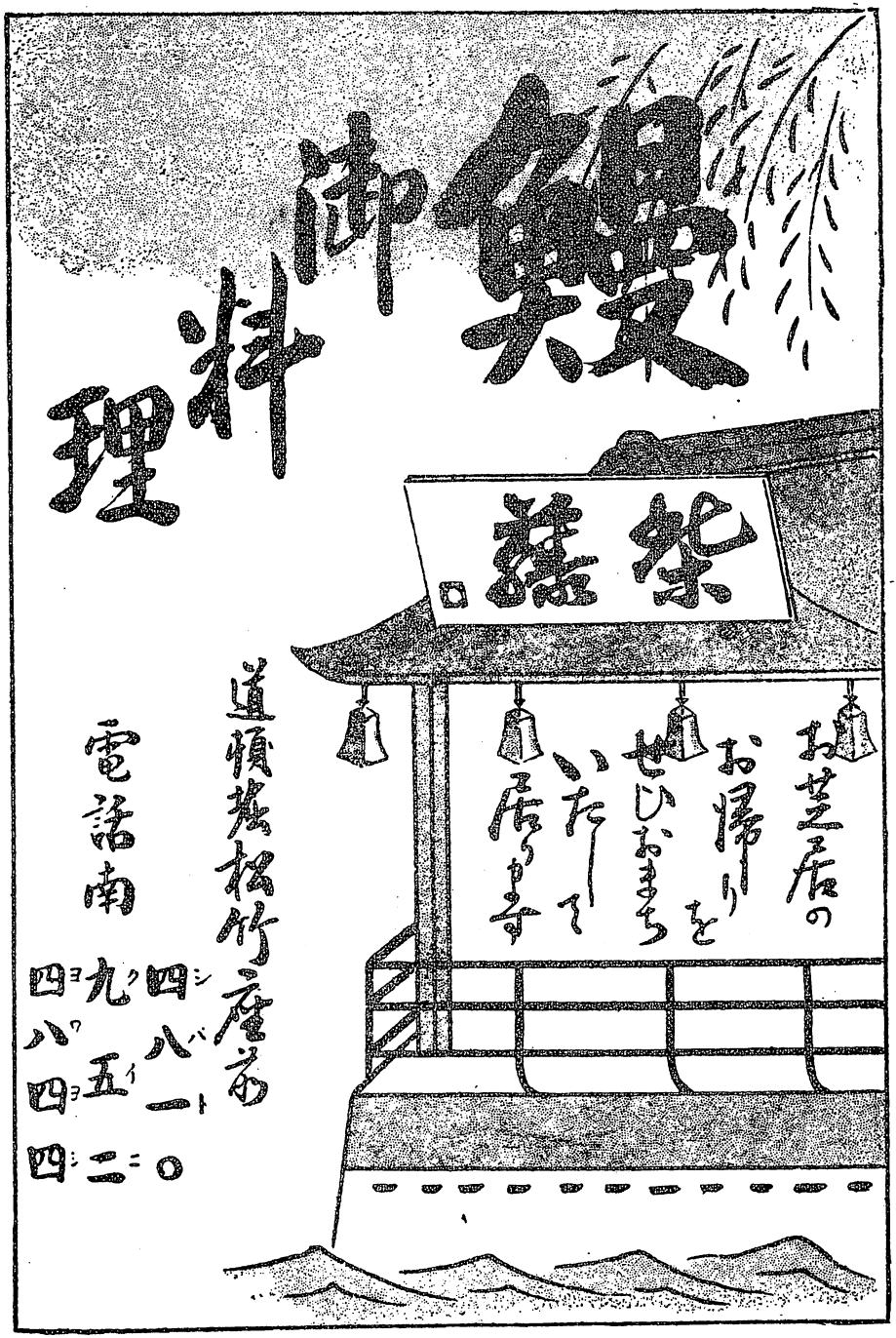
イニンアフの子重八谷水・ゲンオウの州雪川早

大阪市東區京橋三丁目七十五番地

株式會社 大林組

電話東(94)自長八六〇番至長五四〇四番 自長八六四七一番至長八六五四七三番

東京支店	東京市麹町區丸ノ内一丁目二番地	電話丸ノ内(23)自長三四二一番至三四二七番
横濱支店	横濱市中區相生町三丁目五十三番地	電話長者町(3)自長三三三七番至長三三三九番
名古屋支店	名古屋市中區新柳町六丁目三番地	電話本局(2)長一〇〇二五番一八〇二六番
福岡支店	福岡市中島町五十九番地	電話福岡長一四一九番長四七六三番
京都營業所	京都市中京區堺町通御池下ル丸木材木町六百七十五番地	電話本局(2)三三六番三三一七番
神戸營業所	神戸市海岸通十二番	電話三宮(3)八二一九番三一〇七番
金澤營業所	金澤市下堤町六十一番地	電話金澤二四七四番
工作所大阪工場	大阪市港區千島町六番地	電話櫻川(64)自長七六〇番至長七六二番二六九七番
工作所東京工場	東京市深川區鹽崎町一號埋立地	電話本所(73)長一二一五六番二一六八七番


御料理
樂
お芝居のお帰りをせひおまちいたしてゐます
道頓堀松竹座前
電話南
四八一〇
九五二二
四八四四

大阪市東區農人橋二丁目十二番地

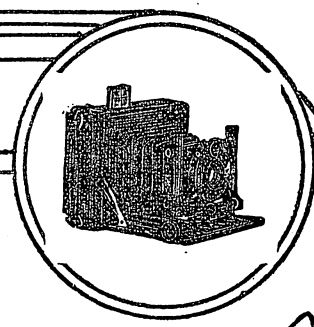
合名會社

大阪橋本組

電話 東 特長一五八〇番 特長一一五八一番 二六五五番

支店 東京市麹町區丸ノ内二丁目六番地
電話丸ノ内特長四七八〇・四七八一番

支店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）



上ゴリ

面影殘す繪姿ホ
をりし昔の懷ぼれて……

肖像、風景、其他凡有る物を
寫眞や小型映画に殘し度いと
思召しの時は是非共
長堀橋は南詰 小西六へ……

寫眞機は
リリーカメラ　小型活動
パールカメラ　寫眞機械
アイデアカメラ　各種在庫
バーレットカメラ

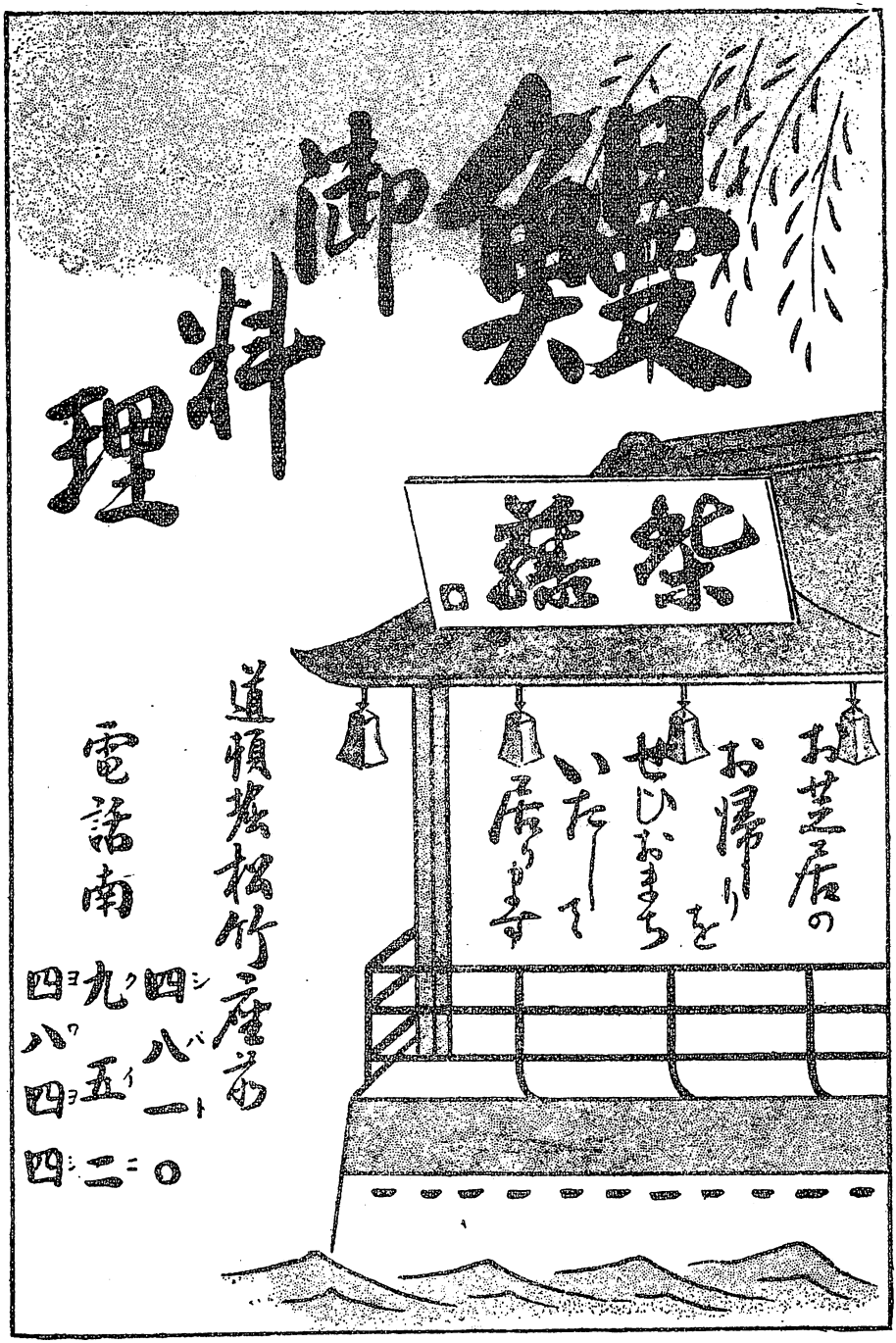
（カタロゲ進呈）

大阪市東區京橋三丁目七十五番地

株式會社 大林組

電話東(94)自長八六〇番至長五四〇四番 自長八六五番至長八六四七三番 自長六六四一九番至長六六四七三番

東京支店	東京市麹町區丸ノ内一丁目二番地	電話丸ノ内(23)自長三四二一番至長三四二七番
横濱支店	横濱市中區相生町三丁目五十三番地	電話長者町(3)自長三三三七番至長三三三九番
名古屋支店	名古屋市中區新柳町六丁目三番地	電話本局(2)長一〇〇二五番長八〇六八番
福岡支店	福岡市中島町五十九番地	電話福岡長四一四一九番長四七六三番
京都營業所	京都市中京區堺町通御池下ル丸木材木町六百七十五番地	電話本局(2)三三六番三三七番
神戸營業所	神戸市海岸通十二番	電話三宮(3)八一一九番三一〇七番
金澤營業所	金澤市下堤町六十一番地	電話金澤二四七四番
工作所大阪工場	大阪市港區千島町六番地	電話櫻川(64)自長七六〇番至長七六二番二六九七番
工作所東京工場	東京市深川區鹽崎町一號埋立地	電話本所(73)長二二一五六番二二一六七番二二一六八番


御料理
繁盛
お芝居のお帰りをせひおまちいたして居ります
道頓堀松竹座前
電話南
四八一〇
九五二
四八四四

十月浪花座
天晴ウオング

秘密結社首領ナ・ホン・フア　井上正夫

紙風船

夫　伊志井寛
妻　水谷八重子

ファンニイ　水谷八重子

ウオング　早川雪州

浪花座

スキナあぶら取紙
皆様のおスキナ……
道頓堀……
スピード時代のお化粧用……
スキナあぶら取紙
（各化粧品藥店にあり）
製造元
中田スキナ屋
大阪
發賣元
朝日堂株式會社
大阪

與へられた武器

監　督……川　浪　良　太

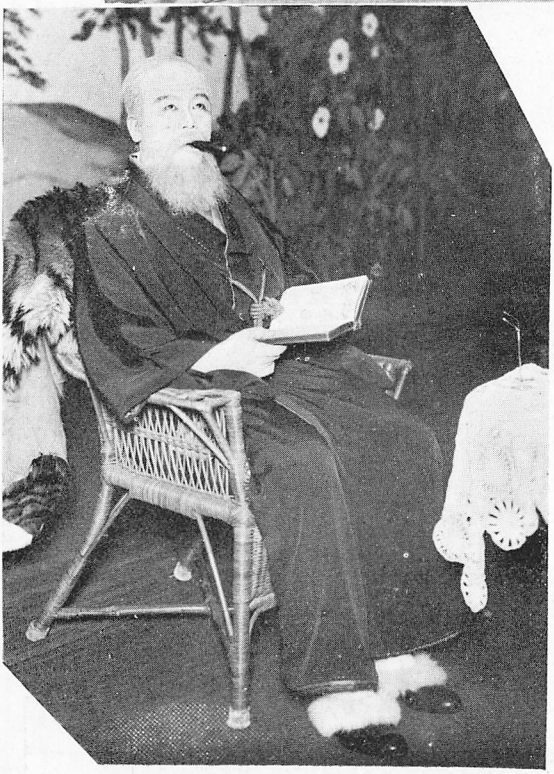
原　作……内　田　新　八

脚　色……村　田　圭　三

主　演……歌　川　八　重　子

讀賣新聞連載……かつては全社會を聳動せしめた某夫人と、某ミリオネアとの葛藤を骨子とした革命的戀愛觀!!

帝國キネマ演藝株式會社



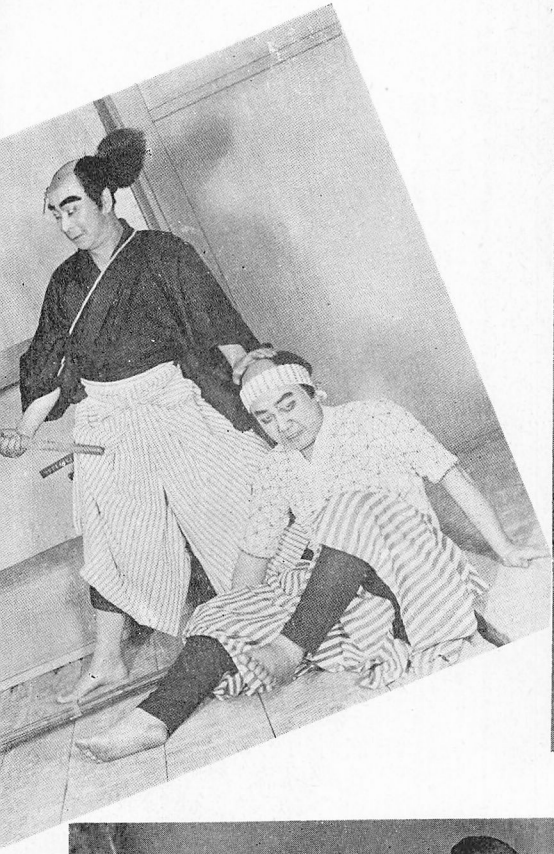
十月浪花座

富岡先生

富岡先生　井上正夫

娘お梅　水谷八重子

江藤侯爵　小堀誠



〃南方戰線に躍る〃

王鶴人　賣春婦姚小寶

島田正吾　久松喜世子

五文叩き

門弟熊吉　高木繁
劍客梁川庄八郎　中井哲
魚屋虎松　秋月正夫

間新六

兩國横網河岸百本杭

新國劇十種

間新六

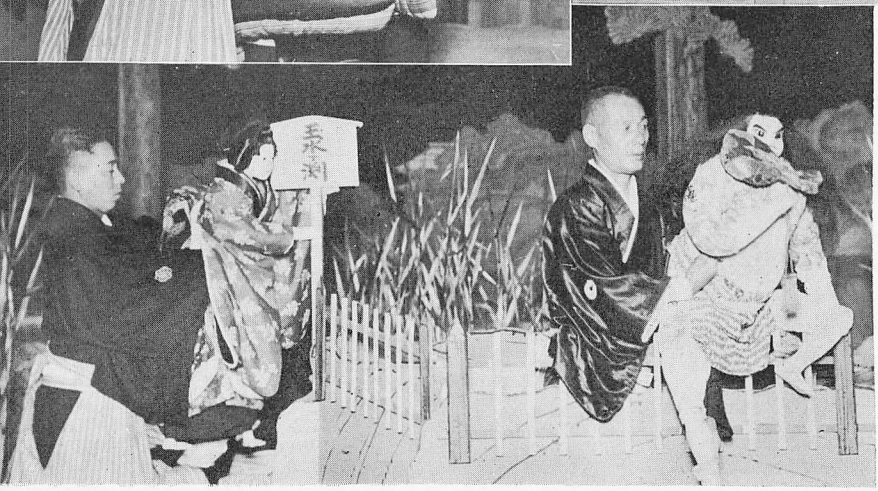
女房お瀧　久松喜世子
間新六　辰巳柳太郎

馮玉祥　中井哲
王鶴人　島田正吾
何玉鳳　山路千枝子

〃玉藻前旭袂〃

〃桂川連理柵〃

〃關取千兩幟〃



〃競伊勢物語〃

十月文樂座

舞臺面

秋十月の映画界に巍然と聳ゆる巨峰がパートリー

高田浩吉主演 太秦 稔監督 涙の街 堀正夫主演 古野英治監督 浪人晴れ

花柴二郎主演 千早晶子 浦波俊子助演 密偵 冬島泰三監督 原作 岡田敏夫 撮影 伊藤宣夫

月形龍之介主演 森静子 若月礼雄助演 疵高き人 悪二郎監督 長谷川伸原作 友成達夫撮影

阪東妻三郎主演 若月礼雄 志賀靖郎助演 維新の同志 悪二郎監督 原作 木村富士夫 撮影 友成達夫

市川右太衛門主演 大江美智子 小夜文子助演 贋首十両 白井茂太郎監督 松井稔原作 鴻三撮影

明石潮主演 廣瀬五郎監督 火華の勘八 阪東妻三郎主演 星哲六監督 清水の小政

松竹キネマ株式会社

劇廣宣圖裝
畫昔傳案飾

阿久田號

神戸市水木通三丁目一六
電話湊川(5)二四〇二番

十月の樂天地

近代座

謎の死骸

不動の森舞臺面

捕吏の家

舞臺面

十月巡業陣

鬼あざみ

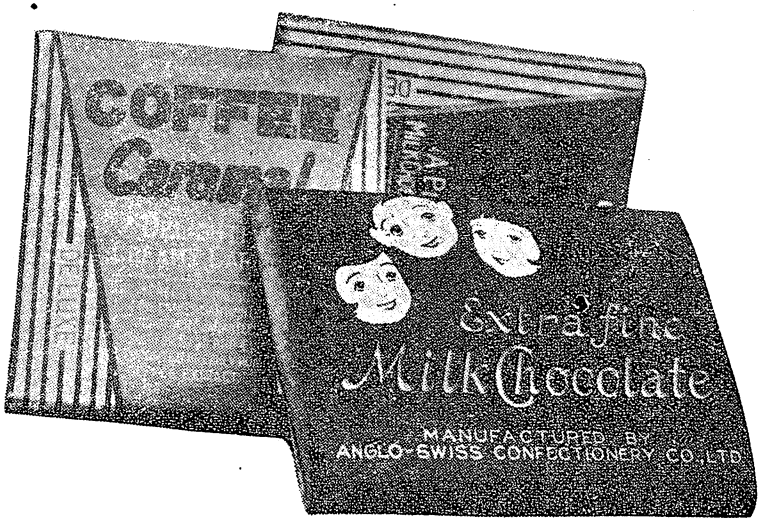
並木麗三郎　林　長二郎

三人の母

妻　歌子　石河　薫

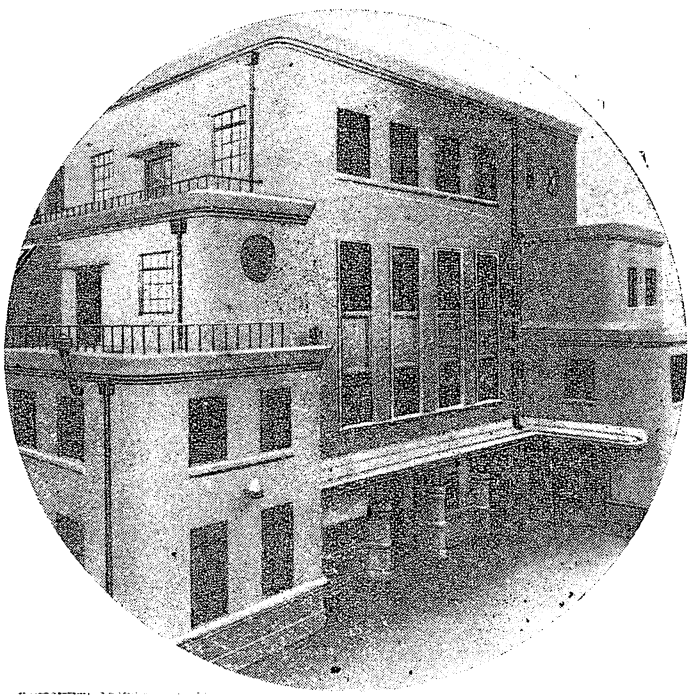
アングロスイス
ミルクチョコレート
コーヒキャラメル
チョコレート キャラメル

大阪市東區豐後町三番地
發賣元 株式會社 横山商店
電話東(94)二〇六六三番



松竹ビルディング

庫倉課度用・庫倉品備の座各	地階
部作製具道大・口入ルビ	一階
部氣電・庫倉の樂文	二階
部裂小・部裳衣	三階
所習練部キゲクガ	四階



松竹衣裳部

電話戎五六三四番

月刊・演劇研究・雜誌

演藝畫報

第五年

十月號

第四十九輯

「五大力」漫錄

鴈治郎と並木五瓶

富田泰彦

「五大力戀緘」と云ふ立派な藝題の通つてゐるものを「春花五大力」にして終つた點には、脚色者の鶴屋南北君に何んとか論據のありさうなものと思ひますが――兎に角並木五瓶原作としてある以上、何處かに古狂言の匂ひが懷かしめるものと豫期されます。

×

敢てこゝに通がるほどのこともありませんが「五大力」と云ふ芝居は、寛政期の名作者並本五瓶の傑作中の而も、我が歌舞伎史に一劃期を作つたほどの革新を示したものです。近松のおまん源五兵衞の「薩摩歌」から出て、曾根崎五人斬事件と云ふ際物を淨瑠璃に書卸されたのが寶暦七年九月竹本座の「薩摩歌妓鑑」であり、それが歌舞伎に移されたのが「初嵐元文噺」で、次に並木五瓶が寛政六年二月中座で「島廻戯聞書」の一齣に篏め込んだのが、この「五大力」の根元ださうです。

×

此の五瓶は澤村宗十郎と共に江戸に下つて寛政七年正月に都座で「五大力戀緘」と云ふ二番目狂言を確立さしたのです。これまでは江戸では春狂言と云へば名題が一本で、何々曾我と冠せたものを、彼が「江戸砂子慶曾我」と云ふ名題を一番目に、この「五大力戀緘」と云ふのを二番目に据へ、元々三代目宗十郎は中座初演にも、大當りを取つた手心のある源五兵衞役で、五瓶の名も共に江戸人に認められたものださうです。

×

一體その頃までの狂言は、たゞ徒に複雜したもので、筋などには、一向お構ひなしだつたものを、五瓶は上方式の技巧の長所を取り容れて、比較的寫實に重きを置き、所謂江戸の世話狂

言の範疇（カテゴリー）を示したものです。其處で初代並木五瓶から四世南北へ――例の大南北の作劇上の推移や影響など比較研究を試みる向さへある位です。

×

五瓶の狂言は徹頭徹尾常識的であり、今の言葉で申しますと合理的な筋の運び方を見せてゐます。――尤もそれ等は上方出の作者として、大近松の感化を受けてゐるものとも見れば見られますが、その近松の浪漫的な氣分を、更に掘り下げて現實的に、總てを觀照してゐる處が、猶昭和の今日――それは南北君の加筆補綴を經て、巧みにアレンヂされたものとは云へ、私達好劇家の興味を牽きつけ得る點ではありますまいか――鳩治郎と並木五瓶、何處かに相似點があるやうな氣もいたします――如何？

其處で「五大力戀縅」と云ふ名題も、合理的にこの狂言の内容を象徴してゐるものとして尊重したいのです。例の「いつまで草のいつまでも……」の五大力の獨吟から三味線の裏皮に「五大力」と書き「是れ見て下さんせえ」の菊野の三味線を見て「ウム、すべて女の人手に渡す文の封じ目に開かすまいと認める五大力」「さいなアお侍さんの魂は刀」「町人の魂は算盤秤」「藝者の魂は三味線、その三味線の封じ目堅う心の誓ひ五大力」以下此狂言中でも見せ場の可い臺詞のキツカケにもなつてゐます。五大力とは住吉奥の院の五大力明王それを願かけての戀文の封じ目、その頃の大阪の色里の風俗も偲ばれる譯です

×

何にしても、この「五大力」から後世類型的な數々の二番目狂言が生まれてゐることも見逃せません。佐野治郎左衛門が八つ橋の吉原殺傷事件を脚色した「青樓詞合鏡」でも芝居茶屋、吉原青樓の内部のスケッチに精細を極め『二人新兵衛』や「伊勢音頭戀寢劍」――ずつと世話にして「縮屋新助」「お祭佐七」等々、鳥渡記憶に浮かんだ丈けでも是れ位あります。もつと細別に類型を求むれば、未だ〳〵あるでせう。だがこゝには其麼穿鑿は無駄なことです。

×

鳩治郎の源五兵衛に就ては、既に定評ある役ですが。――と云つて「すしや」の權太と共にいつものマンネリズムから脚した役柄だけでも、歌舞伎愛好家の看過出來ないものです。飽迄國侍――特に薩岸武士と云ふ武骨さから思はぬ戀に陷ぢて行き、遂に彼の殺伐な悲劇さへ孕んでゐると云ふ心理の過程は鳩治郎の細心な演出に依つて、一層の生彩を放つことだらうと期待いたします。

×

二十年前でしたか、梅玉の三五兵衛だつた頃の印象は、未だまざ〳〵と殘つてゐます。――勿論それ以後にも演つてゐますが、特に彼の菊野の緣切狀を讀み〳〵花道へ出た姿の水々しさ

（四九頁へつゞく）

昔話五大力

高安吸江

よしなし草のよしやよし（生中まみえ物思ふ、たとひせかれて程經るとても、緣と時節の末を待つ、何としよう（互ひの心うちとけて、うはべは解かぬ五大力、さはさりながら變る色なき御ふぜい、やがて逢ほぞえ話ろぜえ、をしき筆とめ候かしく

武士の魂は刀、藝子の魂は三味線、その三味線の封じ目堅う心の誓は五大力と、墨色麗しく認める裏皮、彈き出す唄は二上りで、さいかや七兵衞李文の作、調は作物の上手と聞えた白川檢校です。仁王經にある金剛吼、龍王吼、無畏十力吼、雷電吼無量力吼の五大力菩薩、此れを書狀の封じめにかいて遠方へやるのは、開かすまいとの意味で、釋家では道祖神に習合せる事があり、南都般若寺からの符章に習ひ起ると、天野信景の鹽尻に出て居ります。

「偏屈者、借錢乞、物貰ひ無用」と門口のさけ板に書きつけた老松町の貸座敷、我ものとては大小に空挾箱ばかり、真蓙から行燈、火打箱、煙草盆まで皆家附、詔ひのないサッパリとした武士氣質には家主までも惚れ込んで、忰が事より大切に思ふ位まして一諾を重じてなじみでもない一婦人のために主家の勘氣までうけた其俠骨には、命までもと眞劍な戀をする菊野に無理はないと肯はれます。

五大力三幕、何れ劣りはないが、殊に面白いのは何と云ても此假宅で、剽輕な家主に恬淡な浪人、奸黠な箱廻しに濃情の佳人によつて樣々なナンセンスが次から次へと展開されます。浪宅へ美妓が押しかける尤も好い例としては、名古屋山三の訖住居へ葛城太夫が堂々と道中して來る、痣娘で知られた狂言がありますが、それに比べて是は遙かにプロ的なものです。然しこへ偶々訪れる同僚出石宅右衞門を追歸へすべく、變裝して家主の家内と僞る菊野は、丁度伊勢音頭の貢の内で伯母と稱する

おこんと同巧のお茶番を演じます。

閑話休題として、さてこの第一幕の興味はエロになります。容易に人に許さぬ堅い藝子と、女嫌ひの薩摩隼人、それが偶然の機會から豹變して小供のやうに滅多無しやうに惚れてしまふのです。眞底から嫌いな男の孰拗さから免れるために、他から畏敬されて居る源五兵衞を表向きばかりの情夫に頼んで、ヤツト虎口は逃れたもの、それが祟つて其救主は皆からは侮辱せられ、主君からは目通り叶はぬと來る。そこは北の首さんと云はれた程あつて達引は格別、菊野の指切から急轉直下、紋切形の心府見えたで鳧がつきます。

雨降つて地固まる、嘘から出た眞の惚れやうにきやうとがつた女將お市は「緣を結ぶは此常陸帶」と前垂はづしてその紐で二人の身體をグル〳〵と卷いて其まゝ上手へつきやり、忘れておいた延紙や鏡袋を、あとからソツト投りこむなど、いやどうも至れり盡せりの親切振ですが、それに引きかえ障子家體の外へ來て、うつゝのやうに聞耳立てる三五兵衞には、いかにも昔のお芝居らしい阿呆らしさが見られます。

三幕目は油屋同樣、お定まりの愛憎づかしから殺しになりますが、大分散漫で、整理の必要があります。おこんが助かつて居るに反し、此れは首になつてからでも源五兵衞の手に吸い付いて、其切腹を止めたりします。つまり前のエロやナンセンスを受けて、下の大詰がテロとグロといふ事になります。

此事件の實説として、元文二年（百九十二年前）に薩藩の早田八右衞門が主君の注文した時計を受取るため上阪中、櫻風呂の抱女菊野に騙されて官金を消費した結果、終に他の四人と共に女を殺した話はあまりに有名ですから詳記しませんが、近松の薩摩歌に因んで冠子、景鯉等の妓鑑（寶暦七）やその改題國言詢音頭などが出來て後、寛政元年辰岡萬作のかいた初嵐元文噺の上演が劇としての最初といふ事です。しかし是は何故か私の見た年表には見つかりませんでした。

寛政六年二月（百三十六年前）に島廻戯聞書と題して島津家琉球征伐の事をかき、其四ツ目から此五人斬を入れ込んだのが、江戸の初代櫻山治助と並稱せられた並木五瓶で、此人は同年十月江戸へ下つて都座附となり、翌七年正月さして面白くもない上半を取り去り、五大力戀縅として上演した處、日數七十日を踰えての大當りで、排他的な江戸ッ兒も此れ丈は流石に彼の傑作と推賞せなければならなかつたのでした。

五瓶は元來大阪の道修町に生れ、和泉屋といふ役木戸の倅でしたが、天明以來の狂言作者で、今日まで殘て居る作は藥種御供、五山桐等とかなり澤山あります。是まで作者の給金なんかは役者に比べて頗る安く、廿兩でも騒いだ記錄がありますのを彼が江戸表へ下る時は三百兩取りました。それ以來一般に作者も高給を取るやうになつたと申ます。

扨此五大力が大阪で演ぜられたのは、寛政十一（中）、文化元

（中）（角）、文政五（角）、同九、天保八、十四（中）、弘化三（大西）、嘉永四（中）などと隨分度々ですが、此中でも文政九年九月十五日から中座で箱根靈驗の切に出した時は三代目歌右衛門の源五兵衛、鍛十郎の三五兵衛、澤村國太郎の菊野で中々の大當をとりましたが、天保八年八月十六日から物草太郎の切に阿漕と交代に出したのは四代目歌右衛門の源五兵衛、淺尾與六の三五兵衛、中村歌六の菊野で、此時の源五兵衛は實にそれ以上記錄破りの大出來だつたそうです。

大體此源五兵衛といふ役は、色氣があつても却てはまらず、中々六ッかしいもので、三代目歌右衛門も始め二三日は着付のせいであつたか始めから情夫のやうに見え、別に菊野が賴む必要もないのにと思はれた位だつたのを後に改めたと記されて居ます（註眞庫）四代目は男もよし人品はよし、何處一ッ申分がないが、唯少し色氣が薄い故、それで却てよく適つたのでした（ひめ節）。

同じ成駒家の我が鴈治郎君は、近頃こそ一向演りませんが、以前にはかなり出しました。大阪だけでも明治二十年七月（角、大岡政談の切）、三十六年九月（中、伊達騷動、引窓の切）、四十二年九月（中、錢屋、良辨杉の切）、地方では四十五年七月名古屋帝國座の開場式、それよりも別の意味で大變だつたのは二十八年七月神戸大黑座の時で、前は妹脊山でしたがその三日目に三五兵衛役の先代中村雀右衛門が當時流行のコレラにかゝつて急死しました。尾籠な話ですが再々の便所通ひも間に合はず、僅かの間に頬も落ち、眼も凹んで腰も拔けたのをやつと後ろから介添して舞臺を勤めたが、其中にコロリと往生で隨分大騷動だつたと、いつやら齋五郎君が話して居ました。

今回の上演は廿年振といふ極めて珍らしい事ですが、わけて面白いのは第一あの艶ッポイ愛嬌ものゝ成駒家が、あり餘る色氣を封じて、惡人共から毛蟲の如く恐れられて居る薩摩武士、木訥な女嫌の生野暮な愛を、どういふ風に表現するかといふ事、次に三五兵衛ですが、障子の内の艶語に當てられ、殺し場で長持へ逃げ込んだりなどと三枚目に墮ち易い色敵を、生眞面目で手堅い中にどこか優しみを含む好々爺中車老が、果してどんなに演出するか、第三は高砂家です。

美しく上品ながら色氣は濃厚と云ひ得なかつた彼は、近頃種々の俗事で一層冷かさを加へ、時には荒んだのではないかとさへ怪ぶまれましたが、今回復活といふやうな意味で、其更生の舞臺は頗る興味の深いものでなければなりません。浮氣でなく容易に人に惚れない此優にも、かなりつきつめた戀はあつた。或は今でもそうかも知れません、イヤ寧ろ私はそうであるのを願ひながら、所謂捲土重來で、その恐ろしい奮鬪振を期待して居るのです。

とにかく此度の五大力では、作そのものゝもつ古典味の甘さと共に、主役の役柄に常套でない點を認め、少からぬ興趣を覺えさせられたことを特筆する次第であります。

春花五大力

―十月の中座―　三幕

上の巻　富田屋臺所の中の間

如何にも大屋臺らしい臺所である、藝妓舞妓等が座敷を待つ徒然に指相撲などで他愛もない、料理人も若い者も今日のお客の仕度に忙しい、やがて仲居のお千代が客衆が見えたと藝妓どもを座敷へ追ひ立てた、市塚左十郎磯谷伴左衛門、安松伊平太いづれも千島家の家臣、お千代の手を取つて出て來る、三五兵衛がかねての頼み、菊野の返事はどうであつたと聞くのだがお千代にはそれを計らひかねて、おかみのお市を呼ぶのであつたがお市も此上は菊野を呼んでちきに聞いてはいふのでお千代は菊野を呼びに行つた、菊野は三人の前で三五兵衛の意に從はぬは、同じ家中の源五兵衛にすまぬからといふのである、案に相違した返事で三人もあの四角四面の毛蟲どのがと興ざめ顔で座へ去つた、お市は合點が行かぬので、菊野の心を訊したが、三五兵衛の執拗さに返事に困つた揚句の作りごとであつたのだ、この事は源五兵衛に知らさずにも置けまいとお市はお千代にいひつけて源五兵衛を迎ひにやつた、辰巳屋からの使ひが待つてゐると聞いて源五兵衛は出て來たが、菊野とお市は三五兵衛の執心に切端詰まつたかりの情人に源五兵衛を頼むのである、三五兵衛は自分執心の菊野が源五兵衛と深間と聞かされて醉も醒めて不興氣に見えた、

〆三五兵衛どの御免なされい、拙者はたど醉ひまして何を申したやら、暫らく御免蒙つて醉ざましを致さうサア菊野いつものの樣に介抱たのむ。

源五兵衛は菊野の手を取つて、之見よがしの嗟まじさ、廊下づたひに小座敷へ去つた。三五兵衛に聞けよがしの獨り言、三五兵衛はふと彌助を見て、何やら心にうなづいて彌助を膝近ふ招いた。

返へし　富田屋大座敷

千島家の若殿萬太郎を取卷いての賑やかなことである、むつゝりとした三五兵衛が入つて來て、自分の中座を謝した後、源五兵衛の

座にゐないのを不思議さうな顔で、源五兵衛を呼ぶのである、源五兵衛と菊野は前後して出て來たが、三五兵衛は萬太郎の愚さに附入つて、菊野を取持つて果ては身受沙汰にもならうとした、源五兵衛は此處でも菊野と自分

は馴染であると、キッパリ言ひきるのであつた、萬太郎は菊野を横取した源五兵衛であるから打てと云ふので、之幸ひと市塚磯谷安松の三人は殿の御意とばかり源五兵衛を打据た

〽源五兵衛さん思ひがけない此樣子、かうならうとは露知らず、

菊野は今更に困り果てたが、

〽コリヤ何も云ふな、言ひ譯するもかうならぬ先の事、一旦武士が頼まれたからは是が非でも立通すが、千島の家の國風じやわ。

源五兵衛の覺悟に菊野も堪忍してと泣く、三五兵衛はいよ〳〵笠にかゝつて、大切の役目を蒙つてゐながら、女に魂を奪はれた源五兵衛國にも聞えを憚る、しばらく遠慮仰付られずばなりますまい、と萬太郎に水を注いだので、萬太郎からも目通り叶はぬことゝなつた、三五兵衛の指圖で座敷を變へることゝなつた、三五兵衛のむしやくしや腹はとんなことでは納まらない、是も御意ぢやと源五兵衛を打すえて眉間を割つて小氣味好さに鼻で笑つて皆と奥へ入つた、此場の樣子を見聞きしたお市は飛んで來た、菊野ふつと源五兵衛の眞實に小指を切つて、心中立てを誓つた

源五兵衛も菊野の誠に今は涙人一本立まゝよと決心がついたやうである。

中の巻　老松町の浪宅

今は涙人の源五兵衛大家仁兵衛の情で事かさぬ日を送つてゐた、同家中の出石宅右衛門が訪づれて、一日も早く大切の品詮議を遂げて、歸參叶ふやうと勵まし、許嫁渚の心痛などを物語るのであつた、菊野と彌助は表に佇んで宅右衛門の居るのに入りもならず、そは〳〵としてゐた、彌助は氣轉の借錢乞ひとなつて遠慮なく大聲立てるので、宅右衛門も氣も利かして心得顔に金を紙に包んで源五兵衛の傍へ置いて立去るのであつた、宅右衛門の去る間遲しと菊野は家の内へ入つて持參の肴など三味線箱から取出して、しめり勝ちな男世帶も今宵は花やかに見えた、明日の朝の迎ひを心得て彌助は歸つたが、源五兵衛は御家の大切、猛虎の劍詮議の手蔓に、三五兵衛を客に取つてくれと菊野に頼むのである、菊野も斯程の大事を明かした源五兵衛の心を汲んで、三味線箱から取出した三味線の胴の裏皮へ、五大力と書いて誓ふのであつた。

下の巻　新地出來島屋

田舍武士といふ姿でお大盡振つた、八右衛門仲居の酌で菊野を待つてゐる、菊野は彌助と共に來たが八右衛門は源五兵衛の兄といふので、許嫁の渚、喜平太などを引合はして、源五兵衛の身の爲め二人は緣切つてくれと、手を仕へるばかりに頼むのであつた、三五兵衛も出て來て源五兵衛の身の爲めと共々にすゝめられて、今は菊野も源五兵衛に切文を書かねばならぬことゝなつた、文の使ひは箱廻し彌助一ト走りとばかり駈去つた、菊野は心

の善しさをまぎらす酒に酔つたが、三味線持ち出して三五兵衛の傍へ寄つた、三五兵衛は時よしと菊野をかき口説くのであつた、そして不用意にも自分の出世國取大名にもなれると口走つたので、源五兵衛の頼みも思ひ出さて菊野も心を決したのである。

切文を持つた源五兵衛と彌助が出て來たが此家の女房お咲は客にはしない氣振りであつた、彌助はそれと察して三五兵衛からの飛脚賃五兩をポンと源五兵衛に貸すのである、菊野を隱して逢はさぬのを知つて源五兵衛は、歸りかけたが三五兵衛と菊野が出て來た、互にテレたやうな氣味合がつゞいた、三五兵衛は源五兵衛の前に身體をつきつけて、富田屋のやう自分を存分にしてくれ、それも菊野故と之見よがしの振舞ひであるが、源五兵衛は心に頷くばかりであつたが、三味線の三五大切と書きかえられたのを見ては、源五兵衛の眉がぴりゝと動いた、菊野はかんざしで皮を破つたのである。

〽フム誓ひの三味線破りしからは。

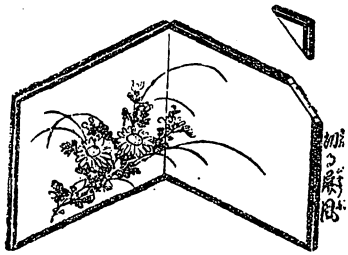
源五兵衛は人でなしと怒りを押へて、彌助をつれてすた〳〵と去つた、樣子を見て八右衛門は源五兵衛の身のおさまりも見えたと喜んだ、渚、喜平太と見えたのは菊野に思ひ切らそう爲めの雇ひ人で、兄と云ふ八右衛門は源五兵衛の若黨であつたのである、二人は禮を貰つて去つたが、八右衛門は三五兵衛と相談のある樣子で菊野を殘して奥へ這入つた菊野は心に濟まぬと思つたか、出掛けやうとしたがお咲に止められて文書かうと一ト間に入つた、家の戸は閉ざされる雨が降るらしい獨吟……源五兵衛忍びやかに出る。

同廊下

菊野は行燈のもとで一心に手紙を認めてゐるそつと忍んだ源五兵衛を見てハツとしたが、源五兵衛は無言で一刀に斬り下げた、八右衛門笠わらじを用意して落延びよと云ふが、源五兵衛は此處で腹切る覺悟である、八右衛門はそれを押とゞめて菊野の今日の仕儀は三五兵衛と相談の上無理に書かした切文と、一切を語つた、源五兵衛はカツとした。

〽うぬは樣子はしらねども、此度のお役目は三五兵衛と同道にて當所へ上りしそも〳〵より、彼に目ををつけ詮議の手づる、菊野を頼んだも皆源五兵衛の差圖、エヽそれとしらずにみす〳〵にたばかられたは殘念ぢやわ。

源五兵衛は早まつた事をと菊野を拜むだ、八右衛門が心づいた菊野の書置きを、源五兵衛は讀んでいよ〳〵三五兵衛が寶刀を持つてゐることが知れた、菊野の敵と三五兵衛が小刀で斬つてかゝつたが、打落されて大刀を拔けと詰められて三五兵衛は大刀を拔く、源五兵衛其手をもちそへてとくと見る、柳の葉ちらら〳〵と風起る。（幕）——



經ケ嶋解說

森　ほのほ

「經嶋娘生贄」は故榎本虎彦(破笠)氏作の新時代劇で、同じ作者の「南都炎上」「みだれ燒」「女歌舞伎」に續いて出來たものです。明治四十二年十月……と言ふと、既う今から二昔も前ですが、歌舞伎座に上演されたのが最初です。

平家物語に載つてゐる經ケ嶋の傳說と宗盛が傘屋の子であるといふ俗說から暗示を得て脚色したロマンチックな作で、是より前に出來た新史劇の「南都炎上」も好評でしたが、これもそれ以上に迎へられたものです。丁度その頃の好尙に適合した作品であつたからでありませう。

併し、後の岡本綺堂氏等の作物と比べると、別に主題と見るものが無いことが、先づ現代の人には物足らぬであらうと思ひます。

この劇を觀る人々はこれだけの事を含んで置いて、舞臺といふものを能く心得た作者の、事件の運び方、人物の動かし方の巧さを觀賞すべきだと思ふのであります。

「平家物語」に據ると、所謂經ケ嶋は應保元年(平治の役二年)二月上旬に築き始めたのであつたが、八月二日、俄に風波激しく起つて嶋を崩壞して了つた。そこで、翌々年三月下旬に阿波民部重能を奉行として再び嶋を築くことになつた。

その時、彼の長柄の人柱と同じに、殿上人の中には未だ迷信的な人柱說を唱へる向もあつたが、既う此時代には反對者の方が勝を占めて人柱說は卻けられたが、その代り石の面に一切經中の文字を一々に書付けて築き上げることにした。

卽ち經ケ嶋の名の來る所以で、嶋はこの後、風浪に浸される

ことなく、往來の便船は海路の安全を得たといふことであります。

前にも申したやうに、此芝居は此傳說を脚色したのであります。

其筋をざッと述べて置きませう。

清盛の妻は、夫の出陣後女の子を生み落しましたが、豫て、女子が生れたら殺すと言ひ置かれてあるので、夫人は家來に命じて由有りげな女の抱く男の子を奪つて、取替兒をします。子を奪はれた女は石和八郎なる源氏の武士の妻でした。これが亡命後の傘屋法橋です。

この樣な不思議な境遇の下に生ひ育つた娘の小枝と宗盛との間に戀が結ばれます。併し、宗盛は明石の前――小枝が仕へてゐる――と祝言の盃を交はさねばならぬはめになるので、嫉妬に逆上した小枝は忍び男の宗盛を罵り、平家をも罵ります。之を聞いた清盛は大に怒つて、小枝を築嶋の人柱にしようとします。

小枝が沈めに掛けられる間際に、法橋が驅け附けて取替子の秘密を明して清盛を驚かします。清盛が人柱の助命を叫んだ時には、時既に遲く、合圖の狼火は上ります。憤怒に耐へぬ清盛は相手の男、宗盛を極刑に處せんとしますが、重盛の爲に諫止され、依然宗盛は清盛の子、小枝は法橋の子として後世の吊ひをするに終ります。

初演の時は、芝翫（歌右衞門）の小枝と重盛、八百藏（中車）の清盛、高麗藏（幸四郎）の宗盛、猿之助（故、段四郎）の法橋で、この外に當時は宗十郎、女寅（故、門之助）、故、市藏故、歌六、吉右衞門、菊五郎も一座してゐました。そして、市藏はこの時十藏から改名したので、乳呑子を奪ひ取る平家の武士に扮してゐました。又、面白いのは此興行に、鴈治郎老が上京して「近江源氏」と「戀飛脚」を出し物にしてゐることです

二度目は大正六年の四月、やはり歌舞伎座で上演されました作者の榎本氏は前年十一月に歿されたので、その追善の意味をも含めて出したのではないかと思ひます。

役々は、やはり八百藏（中車）の清盛、歌右衞門の小枝、重盛、段四郎の法橋で、宗盛は羽左衞門が扮しました。この興行にも鴈治郎老は上京してゐて、芝雀（故、雀右衞門）、梅玉、福助と一緒に「天ノ網嶋」を演じたのでした。

今度の中座も書卸し以來の中車の清盛で、例に依つて力强い演出を見せることでせうし、我童の宗盛も宛然平家の公達らしいでせう。魁車、小枝は氣品に於て歌右衞門に對立することは難しいが、熱情的な藝風は、遠慮無く見物を誘引し得るであらうと思つてゐます。

―十月の中座―

經島娘生贄

全四幕四場

飛鳥　其方の乳にて泣き止みしは親子と定まる宿世の因縁

伏屋　ホンに思へば敵と云ひ

飛鳥　味方と云ふも人の爲す業

伏屋　是非なき事とあきらめました

飛鳥　スリヤ頼みを聞き分けて

伏屋　イカにも此子を育てませう

飛鳥　エ、忝けない

思入あつて懐中より袋入りの鏡を取出し

さて女中、此の鏡は清盛樣より北の方へ賜はりし世にも稀なる名鏡なるが、其のお子樣のお守につけて渡すも後日のため妾が確かに預りて此子が嫁入する時に片見となして遣はしませう

鏡を受取り納める

飛鳥　くれ〳〵もそのお子樣を大事に育てゝ下さんせ

伏屋　其の念には及びませぬ、然しこの子を育つる上からは、どうぞ我子も無事息才に

飛鳥　氣遣しやるな、大事にかけて守り育てん

此時向ふ揚幕の内にて遠寄せの音聞へる

伏屋　アレ又修羅の興の聲

飛鳥　源平分目の今日の合戰

伏屋　其の盛衰が二人の子達の禍福二つの分れ道、そんならお女中

飛鳥　お局さま

伏屋　

兩人　さらばでござんす

飛鳥は鏡を拾ひ、伏屋の手に渡し向ふへ入る、伏屋は思ひ入有つて

伏屋　源平鎬を削る中で、此場の樣子を我夫へ打明け語らば日頃より忠義一途の安近殿、何とて承知をなされうぞ、コリヤ夫へも語はならぬ、さるにても松ケ枝は如何せしぞ、氣を確かに持ちや松ケ枝〳〵〳〵

介抱する、此時遠寄せ烈しく向ふ揚幕より雜兵四人何れも長巻を持

伏屋　我夫ではおわさぬか

義信　其方は伏屋、どうして此處に

伏屋　今朝がたの合戰に清水堂に難を避け、軍の納まるを待つたれど、何時果つべしとも見へざれば、一先づ白川の伯母が方へと志て參る所、シテ軍の樣子は何とでござりまする

義信　殘念ながら味方さん〳〵の負軍源氏の御武運もはや是までぢや

伏屋　シテ御主君義朝さまには何と遊ばしましたか

義信　頭の殿には、野間の内海へ落ちさせられ朝長義平頼朝の公達方には、御行方知れず、某も討死にとは思ひたれど、敵の大將清盛に一矢射て報ひなんずと、此處迄落延びて參つたり

伏屋　すりや夫と、安近殿にも

義信　追つ付けこれへ參らるべし・只此上は八瀬大原の奥に忍び折を見て本意を達せん、それはさておき御内室には安近殿出陣の砌は出

産前でござつたが、無事に産をなされしや

伏屋　安心して下さんせ、一昨日の晩安々と産の紐を解きました

八郎　夫れは重畳、シテ男子か女子か

伏屋　と云ひつゝ八郎安近出る

伏屋　女で御座りまする

八郎　思入れにて云ふ

ウム、女子とあれば女親に目鼻顔立ち似たであらう、サー我れに見せい

伏屋　云へども伏屋はためらふ

八郎　エ、何愚圖〳〵早く見せいと申すに

伏屋　是にて伏屋はおづ〳〵抱き子を八郎に見せる

サテ〳〵子と云ふものは憎氣のない可愛いものぢやのウ、とは云へ是が男子なら立派な武士に育て、我が志を受け繼つがせ源家の爲めにせんものを、女子にては其の甲斐なし、去りながら成人後、聟を取らば必ず源家の御内にて由緒有る武士を選び、必ずや平家の奴原と、二世の契りを結ばせまじ

此時向ふ揚幕の内にてエイ〳〵オー、エイ〳〵オー、エイ〳〵オー

と三度勝鬨の聲を上げる

舞臺の兩人はきつと向ふを見込み

伏屋　アノ勝鬨は六波羅方

八郎　此方に烟を立ち上るは、あれぞ頭殿の御屋敷

伏屋　あなたは盛りへ此方は亡ぶ

八郎　目指す敵は平の清盛、安穩で置くべきや無念の思入れ、此の時松ケ枝正氣付きて起き上り

松ケ枝　奥さま〳〵〳〵、ヲ、まだ此處にお出で遊ばしましたか

伏屋　ヲ、松ケ枝、氣がつきましたか

松ケ枝　あなたはお怪我は御座りませぬか

伏屋　妾に別條はない我夫にも是にお出でぢや

入道　ヤア愚にも付かぬたわ言を、誠しやかに申居るは血迷ふたか名和の八郎

法橋　イヽヤたわ言で無い證據は此文是を見よ

八郎は懷中より以前の文を出して差付ける

入道　やア左樣な文は見るに及ばぬ

法橋　然らば是なる鏡こそ御人覺えが有るで有らう。

〳〵證據の鏡差出せば、清盛は打詠め以前の鏡を出し清盛に渡す

入道　誠に是こそ我妻へつかはしたる唐の鏡、其文見せい

〳〵取る手おそしと開き見て讀む文體に入道は眼血走り狂氣の如く

ヤア者共生贄を止めさせい

〳〵呼ばゝる折から沖には狼烟、上手の奥に本鐵砲の音聞える

忠清　合圖の狼烟が

武士皆々　上り申した

入道　はや海中へ沈めたるか、フム

〳〵沖を見詰し兩眼に自と漲る涙の雫、法橋は威丈け高に宜しく有つて

法橋　イカニ入道、平治に亡びし源家の方々まつた此年頃世を忍ぶ源氏の家來が無念はなか〳〵御身が今の苦痛より十層傾も辛かりしぞ十九年が其間片時も忘れぬ恨みを報ひ雲も霧も一時に吹き晴たる心地なるは、ム、ハ、、

〳〵海にも響く高笑ひ、淨海憤怒つ相格凄く

入道　おのれ淨海程の者を能くもたばかり居つたよな、枯木に等しき汝をば、一ひしぎに殺したとて此入道の心がゆかぬ、イデ是より都へ歸り宗盛めを燒殺さんその時ほへ面を致し居るな

法橋　我一念を達するからはナド宗盛が命を惜まん

入道　能くぞ申した、ヤア〳〵入道が乘馬引け

此時下手にてハアーと聲する

重盛　アイヤ暫らく御待ち候へ

〳〵聲をかけて立出づる小松の大臣重盛公寛

仁大度の風彩は流石平家の柱なり、入道聲かけ

此内東の揚幕より小松内府重盛烏帽子小直衣の拵えにて童に太刀を持たせ隨臣の武士二人郎黨大勢附添ひ出て來たり花道へ留まる

入道　ム、そちや重盛、此入道の出馬を何故有て止めしぞ

重盛　御止め申し重盛が愚心夫へ參つて申上ん〳〵暴威に募る入道の怒りを止め靜々と父の傍へ御座をかまへ

此内舞臺へ來たり、清盛の上手に居並び

父上には物に狂はせ給ふよな

入道　ナニ淨海が亂心せしとな

是にて合方に成り

重盛　人を助くるその爲に人を海に沈めて殺しいかで龍神の御心に叶ふべをや、何卒小枝を助けたべと明石の前が涙ながら重盛への頼みにより走り來たりし甲斐もなく期におくれしは殘念千萬、既に人柱さへ心なき御沙汰と思ふ所へ今又聞けば宗盛を失はんとの御こそ御本氣の沙汰とは存じられませぬ

入道　重盛には仔細を知らねば我を亂心と申すならん此文讀んで見やれ

清盛以前の文を重盛に見せる

此間本涙の音聞かせ重盛一讀する事宜しく思ひ入れ有つて

重盛　愈〳〵以て御亂心八郎と云へる奴源家の家來と有るからは當家に恥辱を與えん爲虛言を構へしと覺へたり夫を深くも御察しなく宗盛を失はゞきやつを初め源家の輩に手を打つて笑はれん、是にても但し御正氣で御座まするか。モシ又此文に認めあるが眞實ならば猶以て我一門の恥辱なり、此事深く祕し給ひ、誰にも仰せ有るべからず

法橋を見て

有重　あれに居るは何者なるぞ

元は源家の武士名和の八郎今日迄は傘張の法橋と申す者に御座りまする

重盛　さては小枝の父なるか

有重　御意の通りに御座りまする

重盛　イカニ法橋、汝が娘は戀慕ふ宗盛を捨て命も捨てたる者ならずや、然るに汝の計らひにて宗盛を失ふ時は娘も定めし本意で有るまい。察する所汝こそ八郎が名を騙る唐傘張の法布ならん

人道　イヽヤ其奴は確かに名和の八郎

重盛　イヤ〳〵それは御見違ひ、八郎ならば源家の武士、況んや當家を欺きしもの、切らねば相成りません、取るに足らざる唐傘張法橋めを助くるに小枝への供養でござる

法橋　イカ樣娘へ供養と有るからは用無き命を永へて今日より源家で無く平家でなく、我は只身を知る雨の唐傘屋、何事も皆僞りでムる

有重　其僞りの世の中に死する計りが誠なる命を捨てし小枝こそ、末世末代の後美名は世々に築島の守りの神とも仰ぐべし

入道　いしくも有重申したり、思へば彼の島淨海には善惡因果のことわりを教訓なしたる善智識

重盛　貴ては法華經を石に書寫し、島に築かせ重盛が此世で會ひ見ぬ妹のイヤ人柱への追善供養

入道　然る上はかの島の名を經が島と名付べし

法橋　その經が島のけふ迄も育てし娘は敵の胤

入道　我子と思ひし宗盛は

言ひかけるを重盛遮りて

重盛　人を迷はせし是なる手紙重ねて世に出でざるやう

手紙を破り佶度成りて

やア傘張の法橋、入道殿の傍近くには恐れあり下り居らうぞ

法橋　ハヽッ

法橋はズッと下手へさがる。

權太演出考

高谷伸

野暮な權太と粋な權太の二通りを、一日替りに鴈治郎が演分けたのは、大正三年九月の南座だつた。この時の役割を見るとお里が雀右衛門の芝雀、梶原が梅玉、彌左衛門が先代橘三郎、維盛が巖笑、若葉の内侍が魁車、小せんが新升の福之助で、あるきの太助が市藏、婆が林左衛門、六代君と善太が扇と魁童とであつた。隨分手揃ひの大一座だつたが、そのうちの半數は故人になつたり廢業したりして、今ではかうしたすし屋は、まう見られないものになつてゐる。芝雀のお里は定評があつたし、橘三郎の彌左衛門は、それからあれほどの彌左衛門を見たことがない。その後も鴈治郎の權太は出た筈だが、私はそれ以來十七年鴈治郎の權太に接しないでゐる。元來、權太の演出には上方系と江戸系と二派あり、江戸系の内にも、菊五郎風と團藏風とある。これは五代目幸四郎から三代目菊五郎へ、更らに五代目菊五郎と七代目團藏の二派に別れた演出系統なのである。

鮓屋の場だけではさほどでもないが、椎の木が出ると、小金吾をゆするのに、どうしてもたんかの一つ位はきらねばならない。泥棒は野暮でもできるが、强請はいなせであつた方が効果がある。といふことが、上方出來の狂言でありながら演出系統の分裂した第一理由である。

しかし、舞臺が大和下市といふだけに、この點はかなり以前から問題になつたことである。六二連の評判記を見ても、

○さてこの一條は今更記者が喋々しく申す迄もありませんが一體大和下市邊の放蕩者にしては五分月代の大イナセの拵といふも一向解しかねる姿なり、大阪では（今はこの風になりしと聞きました）平河原の次郎藏のやうな着附の由。成程そんなものか。然るに此方では中興今樣に成りし譯は中村秀鶴より始まりしといふ事（これも附會の說かも知れません）なれども昔の事にて定規にならず、先づ近年歌舞伎に殘つて

人も知つたるは和泉町幸四郎の型なるべし。その上寺島翁も餘程潤色した事と見ゆるなり。右事長けれども耳に止めた事を記すまでなりとある。天保元年十月角の芝居で三代目菊五郎が權太をしてゐた時、大手筥瀬などの見切者連から、江戸風の演出を批難されて「下市に江戸つ兒はないぞ」と突込まれた。そこで菊五郎は小せんへのせりふに「とうとう親爺に勘當され江戸へ行つて鮓職人になつてゐた故、江戸の言葉を使ひ憶え、今ぢや下市の江戸つ兒だ」といふ一句を加へて、その場を脱れたといふ話も今に傳へられてゐる。

大體に於て、大阪系の演出は丸本に忠實だが、江戸系のはかなり潤色が多い。これはやはり丸本を基準とした演出を正統とする。捨てせりふの正しくないことは、先代菊五郎も狸婆の點で六二連に一本やられてゐるのが一例である。

しかし、扮裝のあまりに汚いことは歌舞伎美論から見て賛成できないから、適當に江戸風を加味することはわるくないが、團藏式のリアリズムは排すべき點が多い。

鮓屋の權太の扮裝は、鬘は逆熊、着附は茶竪縞黑襟附の女綿入、下に縦一寸二分横一寸の辨慶縞の浴衣、咽の臙帶に同じ下帶、帶は小倉とつこ入の三尺に、赤巾着がぶら下つてゐる。草履ばきで豆絞りの手拭を肩にかけ、叺の煙草入を腰に、軸になつた小松内府の像をふところに入れて、左手は彌造をきめ、右手で裾を高く捲くつて出るといふ型が普通で、延若のはこれであるが、鴈治郎が演出を變へた時には、浴衣は辨慶と竪縞とを手拭も豆絞りと縞柄とを一日替りに用ひてゐた。また、先日文樂で見た權太は、大柄な格子の浦團縞の黑襟附きの着附に、頬冠りして出た。源之助の權太は下に浴衣を着ないで母親に持ち出させ、忘れて入るのを權太が持つて行き後に着て出るといふ手順だつたといふ。

在郷唄で權太が出る。彌助とお里の色模樣にちよつとあてられ、繪姿を見くらべた上、咳拂ひして飛びこんでくるあたり、あまり冗くない方がよい。繪像は重盛のが正當だが、ひどいのになると野郎頭の彌助の姿を平氣で持ちだすから笑はせる。

母親を說いて、つい鴈首でこち〳〵まで潜ぎつける所、とかく下品になり易いが、本文にある「甘いわろ」と、母親の甘さにつけ込む稚氣さへ出ればよく、尻をまくつて捻るなどいふ行儀のわるい型は、いくら權太でも避けた方がよい。

彌左衞門が歸つてきたといふので、逃げ込む權太、普通は暖簾口だが、團藏は上手屋臺へ、團十郎は戸棚の中へ入つたとのこと、しかも團十郎のが聞いた〳〵といふ理屈に適つて當時好評だつたといふに至つては、活歷の餘弊救ひ難く、こんな形を無視した理屈穿鑿こそ戸棚の中へ封じこんだ方がよい。一旦入つて暖簾から首を出して覗く型もあて込みが過ぎてくどい。

聞いた〳〵と飛びだしてくるいがみの權太「勝手口より躍りいで」と床も語つてゐるのだから、暖簾口から出るのが當然で

あつて、上手屋蠹や戸棚へ入つてゐては手順がわるい。

この權太は、辨慶縞の浴衣で、兩袖をまくりあげ、鉢卷をして出るのが本格だが、人形では兩肌をぬいで出る。團藏型では前のまゝのだらしのない風で出る。やはり珍型より、見た感じのよい普通の方が優つてゐる。

〳〵尻ひつからげて、二重を飛び下り、兩手をうしろに廻し尻をからげ、來に立つた見御があり、行かうとすると、お里が絡むので、それを蹴倒し、〳〵駈け出だせしが」で、花道七三まで行き、ちよつとおこつき、くるりと右へ廻つて肌ぬぎになり〳〵最前置きし金の鮓桶」で、鮓桶を指さしその指で丸い形を拵え、その手を廻して、ぽんと膝を叩き、絃のツンツンツンに乘つて手と足とを運び、鮓桶の目片をひいて、これと思ふのを一つ取り、花道七三へ出て、脇に抱えての大見得になる。

これは大體延若の型であるが、どの演者によるともこのあたりは大きな差はない。花道七三の大見得は、鮓屋一幕中での一番立派な畫面である。鮓桶の持ち方には各人多少の差があるがそれは大局から見て論ずる程の問題はない。

權太三度目の出は、内侍六代の身代りに、自分の女房子供を繩附きにして出る件である。揚幕から聲をかけて、二人の繩附きを連れてくる。まづ鮓桶に入れた首の實檢がある。梶原とのイキがむづかしい所である。繩つきの顔を見せよと言はれる。親子夫婦の情の見せ所である。

内侍實は女房の顎さきに、足の爪先きをかけて、上げさせる型がある。見た目は派手だが、あまりに慘酷すぎる。理屈を排するにしても、あまりの暴虐は見た目にもい、影響を與へないといつてあまりに弱いのも面白くない。そこで延若型のやうに足の仕事を二人の繩つきを座らせる時に使つて、二人を結び合せた繩を右足でぐいと抑へるやうにして座らせ、「面上げさせい」の所は、すこし躊躇してから思ひきつて右膝をつき、左足を踏みだして、兩手を二人の顎へかけ顔をあげさせ、下手向きで顔をそむけるといふ型も考へられた。

この時の涙が誰にも難かしい仕事で、延若は炬火の煙が目に入つたといふ思入れで見せてゐるし、鉢卷の手拭を解いて目にかける細工なども考案せられたが、あまりに泣くと、後のモドリが利かぬやうになるので、なるべく腹を割らない方がよい。

圖十郎でもこの鉢卷の細工で不評を受けたのである。

陣羽織の褒美を置いて梶原が歸る。彌左衞門が權太を突く。手負になつてからは、あまり動かない方がよい。先代菊五郎が手負になつてから浴衣の下つた形を直したことは、菊五郎らしい失敗だつた。その注意は權太より、それを取卷く他の俳優が持つべき事だつた。今の我童のやうに維盛が悟つてゐるのに權太が陣羽織を踏みつけての七轉八倒は、ちと見苦しい。せりふ廻しの苦心で持たす所である。あと、落入りで幕になる。

お里のことと二つ枕のことも述べようと思つたが、紙數が無い

中座十月興行上演解説

義經千本櫻（すしやの場）

小松の内府重盛の一子維盛は平家没落の後、詮議厳しい都を避け、吉野山に程近い下市村の釣瓶鮓屋彌左衛門に匿はれ、名も彌助と改めて町人姿となつてゐます。

釣瓶すしやの娘お里は、肩襟、裾に前垂ほや〳〵と、緋鹿子の燃え立つやうな結綿して甲斐々々しく立働いてゐます。彌助を維盛卿とは露知らず今宵に迫る女夫の契り、氣もそわ〳〵とときめく胸、其處へこの家の倅いがみの權太が這入つてくるのでお里は吃驚してようお出では心の内、揉み手しながら挨拶する。權太は尖り聲で妹を奥へ追遣り、母親に逢ふと遺に聲も哀れ氣に、愁傷らしく、三十貫を欺し取り、戻りかけ門口入る父親彌左衛門の姿を見るので、權太は驚いて金を鮨の明き桶に隠し奥へ逃げ込む、聽て彌左衛門は息せき切つて駈け退戻り、先刻椎の木の藪際で小金吾の死骸を見てふつと維盛の代首にと思ひ付き、それとも知らず斬つて來た首を鮨桶の中へ隠す。父親が奥へ這入ると、お里は最う夜も更けた故寢んだがよいと彌助に薦めるが、彌助は何やら思案顔お里は先へ寢たものゝ、氣にかゝるのは彌助の樣子。

維盛の内室若葉の内侍は六代の若君と共に夫維盛を尋ねて一夜の宿を求めにすしやの方へ訪れて計らずも維盛と邂逅して、小金吾の討死を語り、寄邊ない身を嘆くので、お里は屏風の中に始終を聞き、今更に焦れた身を恥かしく泣き伏して詫び入ります。梶原樣がお越しとの村人の注進に吃驚して、維盛夫婦を上市村へ落してやります。樣子を聞いた、いがみの權太は勝手口より躍り出で、二人をしめてくれんと取付くお里を突き退けて首の入つた桶を小脇に駈け出します。

梶原景時の後から權太は維盛の首と内侍若君を縄付にして差出します。梶原が引上げると彌左衛門は齒噛をして憤り、刀引拔き樣に權太の脇腹へ突き差す。權太は七轉八倒の苦しみのうちに、維盛の首と見せたは偽首で内侍と若君と見せたはお身替りの女房小せんと倅の善太であると物語り、始めて眞實を明します。一文笛を吹かせて、隠し置いた維盛妻子を呼び出して、一同涙の内に權太は落入る。

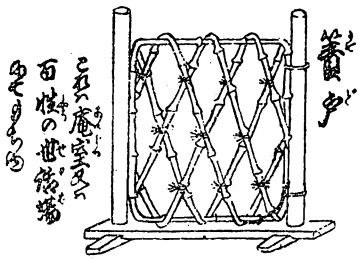
―配役―

いがみの權太	鴈治郎
親彌左衛門	市藏
彌助實は維盛	福助
六代君	一成
若葉内侍	魁車
女房お米	吉大
娘お里	我童
女房小せん	吉三郎
倅善太	政雀
梶原平三景時	中車

權太讃頌

入江來布

秋天や日本に一つよしの山
秋天に雲の峰たつよしの山
みよしの丶櫻紅葉と盛るなる
櫻紅葉奥山雪の凛として
秋山のうら〳〵としてさくらかな
山の錦にこだましにけり一つ笛
落人が拜む野山の錦かな
山薊おそろしけれどむらさきに
山薊すゝきしをにと露の中
女郎花男郎花、そこに立つたる薊哉
血を奔らし花野に強し曼珠沙華
介然と花野に立てば男かな



わが鴈治郎讃美說

倉田啓明

今はとにかく、こゝ十年ばかり前のわたしの生活の興味は、演劇の一點に集中してゐた。もの心つく頃から中學時代までのわたしは、ほとんど浪花の梨園に親んで來たので、月々關西線を利用して五つの檜の競演を、一つ殘さず見物してまはるのが少年時代唯一の豪奢な生活でもあつたのだ、讀者よ、考へても見給へ。山河を距てた遠國から、はる〳〵芝居を見に大阪へ出て來る。まるで狂信徒のやうな少年の姿を——今にしてその頃のことを想出すと微笑まずにはゐられない——しかもその頃のわたしは、何人よりも鴈治郎贔負だつた——といふのも僅か七八歳の幼弱のわたしをして、かくも歌舞伎耽美者にしたのは、まつたく鴈治郎その人の優婉な舞臺が釀し出す、美しい幻影の誘惑に他ならなかつたのである。最初、鴈治郎の艶姿に接したのは、忘れもしない中座で、「新薄雪物語」の奴妻平と、園部兵衞に扮した時で、その時分はまだ梅玉も、團藏も、玉七も、荒五郎も、琥珀郎も、三五郎も、そして芝雀時代の雀右衞門も健在だつた。あゝ、それにしてもなんと古い、なつかしい追憶ではないか。

爾來、星霜三十有餘年、ほとんど數へ切れないほど、鴈治郎の舞臺に見參し、枚擧するに遑ないほどの傑作に陶醉したが、なにさま、彼こそ不世出の名優であり、その技は國寶に等しくその存在は崩壞期のわが歌舞伎を、双肩に擔つて立つと言つても、決して溢美でないことはわかつてゐるけれど、果して然らば彼の何がそれほど國寶に等しい、不世出の名優に價するのだらうか。わたしは鴈治郎の盲目的禮讃者でない限り、ある一部

の人たちの説に盲從して、彼を偶像視することは、到底なし得ない。なぜなら、わたしにはわたしの獨自の見地があるからだ鴈治郎禮讃黨はいふだらう。「あの堂々たる錦繪のやうな風姿を見よ」と、なるほど彼の舞臺顏はすばらしく立派で、いかにも役者らしい輪廓を具へてゐる。あれほどすぐれた舞臺顏は、現代東西の劇界を見わたしても、おそらく他に匹儔するものをもとめがたからう。だがこれを賞揚するのは、畢竟彼の天賦の資を讃美するにとゞまつて、しかも風丰の如何はあながち名優のパロメーターにはならない。たとはゞ三藏圓の吉野五運が最負にした四世中村歌右衞門はどうであつたか。また先代市川小團次は如何。たゞ風丰のみで品隲するなら、鴈治郎は古名優らしい容貌を具へてゐるといふだけで、たゞちに名優であるとは言ひ得ないだらう。更に禮讃黨はいふ「鴈治郎の技巧は天衣無縫神技に等しい絶品である」と、なるほど、わたしとてもその巧緻な技巧をみとめるに吝ならぬものだが、しかしまた一方では、この纖巧な技巧を批難する論者もないわけではない。特に江戸歌舞伎の生世話物を見なれてゐる東京の劇評家などは彼の技巧をあくどいと言つて貶黜する。しかしこれも東西藝風の相違で、わたしはこれをもつて褒貶の對象とはしたくない。次に禮讃黨はいふ「近松物の俳優として鴈治郎は、古今獨歩である」と、だがこれには大いに異論がある。さしづめこれは木谷蓬吟君あたりの所説だが、これを反駁するには長文を要するから、こゝではわざと省略する。ではわたしが鴈治郎を讃美するのは、いかなる理由であるかといふ問題に飛躍しよう。

試みに問ふ。世の好劇家諸君よ。

現代の俳優にして、鴈治郎ほど「熱」のあるもの、果して他にあるか。――これだ。この「熱」だ。あの高齢にもかゝはらず、舞臺一面に磅礴するあの「熱」の力――こゝに鴈治郎、稀代の名優としての存在價値があるのだ。そしてこの尊むべき「熱」は、彼の不斷の研究的精進によつて、層一層燦乎たる光を放つて醞釀される。それ故、彼の藝風を好むと好まざるとにかゝはらず、この「熱」の前には等しく頭をさげずにはゐられまい。わたしは過去三十年間、幾多の名優の藝に接して來たが彼ほどいつ見ても「熱」のある、技藝の持主を知らない。しかのみならず、彼の「藝」は、劍劇役者に見るやうな、馬車馬式がむしやらのそれにはあらで、圓融無礙な技巧の燻しをかけた譬ふべくんば磨かれた水晶が泥中に汚れないと言つたやうな、八面玲瓏、明鏡止水のごとき心熱なのだ、むかし澤庵禪師が柳生但馬守に、劍法の奥儀を說いて書き送つた「不動智神妙錄」第十一に、「冤ニ放ル心ヲ要レ放」といふ言葉があるが、この心境こそ鴈治郎の神技の極致を直指するものでなくて何であらう。世の劇評家が往々にして、彼の技巧や風丰の末梢的方面ばかりをあげつらふて、その眞生命ともいふべき、この「熱」の眞骨頭を把握し高揚しないのを、甚だいぶかしく考へてゐる。

さてこゝでちよつと卑近の好例をあげてみよう。それは「勸進帳」の富樫だ。幸四郎の辨慶は師匠ゆづりと稱して定評あるものだが、ワキ役富樫に鴈治郎が扮するときは、その熱烈な氣魄に押され氣味で、ともすれば折紙附の辨慶も、風格がなんとなく小さく見える。これは藝の壓力といふよりも、むしろ正しく「熱」の力なのだ。またたとへば、こゝに「大晏寺堤」がある。これは誰しも知つてゐるとほり、鴈治郎得意の藝であるとともに、仁左衞門の十八番でもある。そして演出の細部に亘つて評すれば、一長一短は免れないけれど、「熱」といふ一點に觀點をおくと、仁左は到底鴈治郎に及ぶべくもない。これと、おなじことは「伊勢音頭」の貢にもいへるだらうとおもふ。それから彼の「梅忠」や「紙治」は、又かとおもつても、見るたび毎に新しい工夫と「熱」の力で知らず識らず恍惚の境に誘はれる。

以上はわたしの鴈治郎讃美說の一節である。それにしても彼が道頓堀へ出演する際には、その出しもの、撰定について、松竹では白井さんはじめ關係者一同、すゐぶん頭をひねることだらうと推察するが、こゝ久しきに亘つて宿題になつてゐる「競伊勢物語」の紀有常や、草双紙趣味で春狂言向だが「新薄雪物語」などは、是非とも近い將來に上場してもらひたいものだ。特に「伊勢物語」だけは今年中に見たいと念じてゐる。よほどむかし梅玉在世の頃、高砂家の小よしで見て以來出ないが、いま小よし役者に適當な人がゐないためなら、梅玉ほどの豐な滋味はなくとも、東京の中車がゐるではないか。橋尾老人を招いて上演すればまづもつて批の打ちどころのない結構な舞臺が見られるだらうと信じてゐる。

次いでわたしが、鴈治郎にやつてほしいと思ふのは、近松巢林子の時代淨瑠璃「室町千疊敷」(津國女夫池)だ。かういふといかにも妙な註文のやうに考へる人があつて、あの院本の何處をどう演ずるのだと、不思議がるかも知れないが、さういふ人はまづとつくと熟讀してほしい。さすればなるほどと氣がつくだらう。尙、鴈治郎が近松役者として古今獨歩か、否かといふ興味ある問題については、他日を期して愚存を述べるつもりだ。まだこの他にやつて貰ひたいものゝ腹案はかなり多くある。たとへば大阪では許されないかもしれないが、西鶴の「好色一代男」を新しく脚色したもの、——先般不許可になつた池田大伍氏の作とは違つたものでなければならない——など、いろ〳〵ある。

こゝまで書いて來ると、十月の中座の鴈治郎は「千本櫻」のいがみの權太と「五大力戀緘」の源五兵衞を出すといふ消息があつた。なるほどこの二つもわたしが見たいと思つてゐたものだ。前者は二十年振、後者も久し振だ、權太には五代目菊五郎の典型的の演出があるが、別樣の意味で鴈治郎のもいゝにちがいない。また源五兵衞はいふまでもなく獨壇場だ。今度こそ是非見るべき芝居だとおもつてたのしみにしてゐる。

連獅子

鸚鵡石

——十月の中座——

梗概

爰に法華僧連臺と浄土僧遍念來りて互に宗門爭ひとなつて面白き振ある内地鳴り震動する二人は獅子が出て來たと驚き去ると此處へ親獅子の精と子獅子の精と出で來りて長唄鳴物にて振事あつて幕。

登場人物

—天竺清涼山の場—

一、親獅子の精
一、子獅子の精
一、法華僧蓮臺
一、浄土僧扁念

幕明く。橋掛りより法華宗の僧侶蓮臺旅形り好みの拵へにて出で來り舞臺能き所にて

法華　罷り出でたる者は豐芦原の甲斐の國身延山の僧でござる聞き及ぶ天竺の清涼山は殊々絶所故修行いたさねば老ての物語りがないと申まづ〳〵そろ〳〵と昇りませう。如何程參らぬに草臥てござる程にまづ此所にて少し休らいませうぞ。能き所へ休む此所へ浄土の僧出で來たり

浄土　罷り出たる者は東山黑谷の僧でござる聊か思ふ志願あつて此清涼山へ參つてムるまづ〳〵そろ〳〵上りませう。

法華　あれへよき僧が見へられた呼かけて道連れに致そうと存ずる。〻〻申し〳〵。

浄土　こなたでござるか。

法華　中々

浄土　何の御用でござる。

法華　シテこなたはどれからどれへござる。

浄土　いや其昔貞友の舜照法師捨身の行にて此清涼山の石橋を渡りし事を傳へ聞く我も捨身の行にて橋を渡り文殊の浄土へ參る心でおじやる。

法華　愚なり上味噌や黑豆商ひ賣の御臨行では苦切りめらりな石橋づる〳〵と一足踏み外せば下には年經る獅子の群居つて生ある者を喰すと申事じやに依つて二つもなき命を失へば我法華經の一天四海皆扶妙法の祈禱をなせば如何なる難行惡獸でも妨げいたす事なけれど法華にならつしやりませ。

浄土　イヤ〳〵法華にはなりともものふおじやるそなたに意見がしたいわ一都二十八品ン抔として六つかしい事を願ふより南無阿彌陀佛とさへ申せば假令惡獸毒蟲でも念佛に恐れをなせば災ひ却つて幸ひとなれば愚僧が法にならせませう。

法華　か樣な事を長々と申たとて際限がござらぬ去らぬ去らば語つて聞そうなら。

浄土　唄につれてよろしく振あつて、何んと有難い法問であろふがな。

法華　イヤもつといわせませ。

浄土　イヤ是まで〻おじやる。

法華　夫れはからしが利いて泪がこぼれたものでおじやらふ。

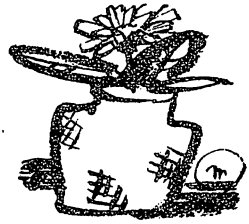
浄土　まづ夫として貴僧とかせませ。

法華　さゝ宗論でおじやる程に愚僧の申ぞ是へよりて聞かせませ一念彌陀佛即ち滅無量在といふ事があるがお聞やらうのう。

浄土　そんな事は聞いた事がおじやらぬ。

法華　聞すば是にて申候はん。

浄土　唄につれてよろしく振あつて、



天晴ウオングの舞臺裝置と照明について

遠山靜雄

×

作者は一から十までの舞臺術を知り拔いたベラスコだ。舞臺監督も、舞臺裝置照明の設計者もいらない程こくめいなト書の書き振りである。

×

だから舞臺の設計も樂だと云へば樂だとも云へやう。だけど僕はこんなのはいやだ。やるのならやりばえのする方がいゝ。手ごたへのあるのがいゝ。苦勞し拔くのがいゝ。創作に苦しむのがいゝ。ト書きに束縛されてそれ以上に出られないでもがくのは有難くない。

×

今度の舞臺裝置並に照明には苦勞は可成りして居る。しかしそれはくだらない苦勞が多い。どうして作者の指定を滿足させ乍ら自分の意欲を表現しやうかと云ふ、一種板ばさみの苦勞である。

×

設備——殊に照明の——が不十分な爲に思ふとが出來ない。それでどうにか切り拔けて行かう——自分の藝術的滿足に妥協を求めやうとする苦勞位下らないものはない。

僕はこの仕事をしてから、一般の評判のいゝにもかゝはらず可成り憂鬱であつた。

×

いよ／＼これを大阪でやることになつた。さあ大變だと思つた。僕は松竹座が出來る時その照明設備に關與したことがあるのみで他の道頓堀の劇場は一切知らない。だから見當がつかない。しかし、恐らく十分な照明設備があらうとは思へない。こ

う云ふと甚だ大阪を輕蔑した樣に見えるかも知れぬが、これは單に大阪の問題ではなく、我國全體の現狀なのである。だから舞臺照明をやれと云はれることは、鐵砲を持たずに戰爭に行けと命ぜられる樣なものである。勝算ははじめからない。たゞ愛國の犧牲になるだけである。

×

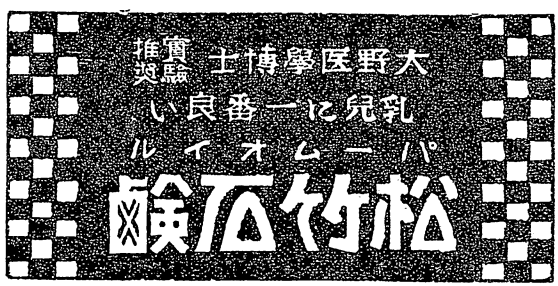
こう云つた設備上、從つて心持の上のハンディキャップをもつて大阪の紳士淑女にまみえることは、僕としては甚だつらいのである。

が、幸にして大道具主任合室氏もわざ〳〵帝劇へ來て打合せをして下さるし、又照明の主任村田氏も特に上京して相談していたゞき、熱心に困難な仕事の準備をして下さることだから、不利な建築的、機械的、電氣的條件の下にも、最善の効果が得られるだらうと思つて居る。

×

舞臺上の詳細にわたつては格別申上げることはない、實際を見て批判していたゞくのみである。たゞ二つの申譯をさせていただくならば、一つ、場面が晝だか夜だかわからない樣に、いさゝか時間を無視したところがある。これは脚本が純寫實によらず、やゝ幻想的な浪曼趣味をその內容にもつて居るために許容さるべき一つの舞臺技巧だと思つて居る。二つ、第三幕支那街は赤と群青とを基調にした舞臺面を考へて居たのであるが、演出者の意向でチョコレート色と暗灰色に變へた。

——（樂の日帝劇樂屋にて）



母國の舞臺に立つまで

早川雪洲

今年の六月、九州から招待を受けて講演旅行に下る途中在阪の友人諸君から呼ばれて、約一週間大阪に滞在したことがある無論友人と連れ立て道頓堀の夜を漫歩したことも一再ではなかつた。赤い灯、青い灯、ジャズ、カクテルと道頓堀の近代的なラプソディーも無論のことではあるが、何よりも私の眼を喜ばせて呉れたものは、五座の正面破風に沿ふて一際目立つ、古風な櫓や、その下で初夏の宵風に飜へる櫓下の大幟といつたやうな、東京の芝居街では見たくとも、もう見ることの能きない芝居風景であつた。

それから半年と經たないこの十月に、自分が井上正夫君や水谷八重子孃と一所に、この芝居風景の中に織り込まれて壽三郎君から贈られた、私への櫓下幟が道頓堀の、夜風にはためかうなどゝは、誰がその時豫想し得やうか。思へば奇緣と謂ふべきである。

×

私が九年振りで第二回目の歸朝をしたのは、今春四月のこと世間では私のプロダクションが出來たから……とか……或ひは內地で映畫の製作をする爲とか、いろ〳〵な風說で私を迎へたが、眞實を云ふと全くの白紙狀態で歸朝したのである。噂をいろ〳〵に生んだ私の爲のプロダクションも、その條件が私を承知させないので、全然中止の止むなきに至つたと云ふ報知を受けたので、一切の面倒もないと見たのと殊に本年亡兄音次郎の七回忌に當るから法要展墓をしたいと云ふのが歸朝唯一の目的であつた。從て滯在期間も二ケ月位の豫定でやつて來た。幸にして其間にプロダクション設立の話が、信用すべき狀況で出來さうなら、相談に乘てもいゝと云ふ程度であつた。勿論ステージに立たうなどゝ云ふ野心など、當時に於てありやう筈がなかつたのである。

由來私の性格として、釋明とか辯明とか云ふことが大嫌ひな爲一切世間の噂に風馬牛で、萬事信念で押し切ると云ふ性質であるから、時に大きな誤解や、噂倒れにされることが屢々あるけれども、狼狽てゝそれを打消したりなどしない。今度も早川はこれを機會に松竹入りをするとか、蒲田のメムバーに加はるとか、いろ〳〵噂もあるやうだが、單純な動機から偶然に話が出來上つて、漫然と出演したに過ぎない。最初から斯ふ云ふことになるのだつたら、舞臺用の照明機具などでも、日本にない珍らしい、精巧な、それで然も簡單な器具や、擬音裝置とか、お土産に持て來たいものが澤山にあつたのだが、ほんとうに惜しいと思つて居る。

×

今年の六月、今度の芝居の舞臺監督をされて居る長田秀雄、それから私のマネージャーをしてくれて居る田口櫻村の兩君と自分と三人が九州の新聞社から講演の爲め招聘されて福岡、長崎、熊本、佐世保、若松、島原半島、別府等を巡遊したことがある。その西下の際、私は東京から特急に乘て來た長田君を大阪へ迎へて、私は田口君と梅田から乘り込んで車中に落ち合つた。日活の淺岡信夫君も「海の祭」のロケーションで長崎へ行くと云ふので同車したことがあつた。

恰度晩餐前だつたので、四人で食堂車に入り込んで、食事をしながら、芝居にしても、映畫にしても、結局目新らしい面白い脚本がなくて困て居ると云ふ話を聞かされた。殊に新派の脚本難と云ふ事が、主題として話された。その時に私は、興業價値に富んだ大衆的なものとして、ダヴィッド・ベラスコの作品などに手を染めてはどうかと云ふ話をした。

ベラスコは或る簡單なテーマを取て、縱横無盡にオーケストレーションして行く銳どい感覺のある劇作家であり演出家であると云ふことを話した。その一例として、ベラスコが私の爲めに書卸して呉れた「"The Honorable Mr. wang"」(天晴れウオング)のストーリーを話した。

長田君と田口君は非常に興味を持つて聞いて呉れて、是非それを日本で演つて見ないか、能きる丈け骨を折るからと云ふことであつた。阪神間を走る特急列車の食堂車の中の此の數十分間の話が、今度私しが母國の舞臺に立つ動機となつたのである

約一ケ月を九州の旅空に費やして、歸京すると兩君から、此の話が座談として、松竹の大谷社長に持ち出された。大谷氏も非常に興味を持たれて、一夜大谷氏から御招きを受けて「切角歸朝したのなら、母國の舞臺に何か足跡を殘して行つてはどうか、及ばず乍ら一臂の力を貸さう」と云ふ、懸篤なる御勸めもあつたので、遂々冗談から駒が出るやうなことになつて、出演を承知して、一座のコムビネーション等に就ては、大體自分の希望をお話しして、大谷氏にお任せした。そして長田君が飜譯を受持ち、私は譯本の訂正やら、カットやらをすることになり、

發表まで極秘と云ふ打合はせで、七八月の炎暑の最中、晝間は來客が多いので、全く仕事が出來ないから、夜十時頃から帝國ホテルで、私は長田、田口の兩君と、連夜徹夜で脚本の訂正と演出の工夫に沒頭した。或る時など眞夜中で三人で台詞をつけ乍ら、演出の段取りをつける爲、大きな聲を出したり、笑聲を出して見たりしたので、隣室の西洋人から抗議を出されるやうな喜劇さへあつた。

×

八月中旬頃、松竹から顔觸れが發表された。見ると舊識の井上正夫君や、水谷八重子君、それに新人の花柳章太郎君、老巧な小堀誠と云ふ都合のいゝコムビネーションなので、私も非常に喜んで、八月十三日頃から帝劇の稽古に取りかゝつた。

私の出演が發表されると、多勢の友人達は非常に心配して「君の樣な性格で到底作法の難かしい日本の樂屋生活は能きない。問違ひでも起すと困るから中止してはどうか」と眞劍に心配して呉れる人も多かつたが「自己と云ふ意識に囚はれないで三味境で動くと云ふ觀念で演るから心配して呉れるな」と平氣で稽古に入つた。

幸いにして井上君も熱心に私に助演して下すつたし　初對面の花柳、小堀、大矢の諸君も心持よく私を迎へられたし、八重子さんなどは、パラマウントの倉庫へ押しかけて行て、扮裝の參考品を調べて來ると云ふ熱心さに、八月の炎暑も忘れて稽古に勉しむことの能きたのは何よりも喜ばしいことであつた。殊に舞臺裝置と照明に就ては、遠山靜雄氏が私の氣持をよく呑み込まれて、面倒な照明を、あれまでに効果を出されたと云ふことに就ては敬服の外はない。

×

愈々初日が出ると云ふ九月一日の朝。私は大震災七周年の大法要のある本所の被服廠跡の納骨堂に花環を捧げての歸るさ、午後一時頃帝劇の前を通ると、熱心な觀客諸君はもう長蛇の列を作つて、五時の開幕を待て居る。これを車窓から眺めて何とも云へない感激に打たれた。

爾來二十五日間毎夜引續いての好況と、拙ない私の出演を斯くまでも熱心に迎へて下された幾萬の觀客諸君の熱烈なる御聲援に對しては何の感謝を酬ひてよいと言葉がない。

×

今やまた關西劇壇の御招きを受けて道頓堀に出演することになり、昨夜も立錐の餘地なき盛況裡に初日の舞臺を大過なく勤めた。この素晴らしい聲援と支持とに對して私はいま感激に充ちて、何とも筆舌に現はし得やうもない。

たゞ私はこれ丈けをお約束する。もし許されるならば、今後も出來る丈け機會のあるごとに、優れたる脚本を母國の劇壇に提供して、そこから何か新らしい副産物をもたらし得る一つの導火線になる位の御奉公はしたい……と、思つて居るのである

ダウイット・ベラスコ原作
アクメット・アブダラ
長田秀雄譯並舞臺監督

天晴れウオング 三幕

—浪花座十月興行上演—

支那の湖南に在る僧院の庭

祕密結社の暗殺執行者ウオングは、生れ故郷のこの土地に歸つて來て、死んだ人達のために頗る奇怪な姿で突ッ立つてゐる偶像に祈禱文を貼りつけてゐる混血兒のファンニイは歌を唄つてゐる。僧院長カン・イーが來ていろ〳〵と法の教へを語り合ひウオングは「愛は偉大な信仰だ、愛は凡ての疑惑に答へて呉れる」と斷じ、やがてウオングとカンは全能の阿彌陀如來に祈りを捧げる。

このファンニイはウオングの一門の支那人と母なる白人の間に生れたのでしたが、兩親が死んでからはウオングが引取つて、或る外國婦人に預けて置いたので、ウオングはこの娘は自分の魂の夢だとまで愛撫してゐたのです。再び彼の地に行つた時、遂にウオングは恐れ戰のきながら彼女に愛を打明けたとカンに物語りますその物語りはこれから始まるのです。

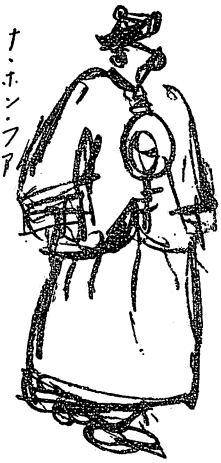
ニューヨーク支那街の阿片窟

チン・ソウ商會の一室。ウオングはファンニイとは餘程年が違つてゐることを氣にしてゐるが、ファンニイは未だ若くて強いからこそ戀が出來ると言ふ。其處へ醫者や、老占者や支那人達が大勢やつて來る。ファンニイは醫者のエン・ハイやセットルメントの職員でファンニイを教へ育て上げて來たラッターにウオングと結婚したいと思ふと云ふ。

ラッターはウオングに向つて、ファンニイとエン・ハイは二人共アメリカ生れでしかも一緒に大きくなつたことゝ、二人はとても愛し合つてゐるのだとウオングに歸やく。ウオングは何も見ない積りだ、たゞあの娘が幸福であつて呉れゝばいゝのだと答へる。ファンニイはウオングの方へ戻つて來て、さあお嫁入りの支度をと急ぎ、ファンニイはラッターやエン・ハイと一緒に買物に出てゆく。

皆が行つたあとで老占者はウオングに、ファンニイの易を見、あの娘の行先には恐ろしい罪惡が待ち構へてゐる……あんな女と一生連れ添ふとはあきれたものだといふ。ウオングはこれを一笑に附す。其處へファンニイが息せき切つて飛び込んで來て、赤い狐のスカーフを見付けて來た、とウオングから十五弗の金を受取つて喜ぶ。祕密結社の首領ナ・ホン・ファが來て、虎と蝶々が仲良く暮せるかと言ふので、ウオングはたゞ實行だと答へる。其處へファンニイが若くて美しい首領の妻リウを連れて來て、二人

で活動見物に誘ひ出して來たから許しを享けたいと言ひますが、首領は不氣嫌でリウに歸れと云ふ。何事かリウを猜疑の眼でみてゐる樣子にウオングが仲へ這入つて出してやつたあとで、



ウオングと、ナ・ホン・フアは二人の若い女の事で云ひ爭ふ。前後で老占者が二人をなだめ大變、大變な占が出てゐると告げる。曰く、あの娘には恐ろしい祕密がある……と、ウオングは、よろしい眞心を籠めた戀の力で勝ち拔いて見せると力強く叫ぶ。

ウオングの住居の居間

（前幕より三ケ月經過）ベル・ストリートのウオングの住居はウオングとファンニイの異つた趣味の反映です。今日は二人が結婚後三ケ月の記念日で、二人知人多勢が招かれて來てゐて、如何にも樂しさうな集ひです。醫者のエン・ハイや阿片商人の夫婦などが盛に二人を祝福し、暫らくはいろ〳〵な話題で食卓が賑はふ……。やがて首領のナ・ホン・フアもやつて來る。エン・ハイが立つて、ウオングにこの最も羨むべき樂しき家庭の感想談を願ひたいと同意を求めるので、首領の指圖もありウオングは起つて胸一杯の喜びを訴へ、絹の手巾に包んだ一足のオレンヂ色の金絲の刺繍のしてある靴を出し、母の遺品だ、是を履いて呉れとファンニイに贈るのです。

程經て、食事も終り一同は自由に談笑に耽る首領の妻リウは夫と何かブツ〳〵云ひ合つてゐるが、ファンニイはリウを促して踊つたり唄つたりするので、ナ・ホン・フアは益々不機嫌。お客は一々挨拶を交して歸つて行く。あとで二人は幸福に滿ちた今日を心ゆく迄語り樂しみ、ファンニイがあの三十三丁目にあつた美しいフランスの化粧道具を買つて來て呉れと云ふのでもう十時だと云ふのにウオングはそれを買ひに出掛けて行く。

獨りになつたファンニイは一人で支那歌を唄つてゐると、階下のドクター・エン・ハイの部屋から呼ぶ聲がして、間もなくエン・ハイがやつて來る。そしてウオングが歸つて來るまで自分の部屋へ行かうと、ファンニイにちよつと出掛けるが直ぐに歸ります、と書き殘させ、いやがるファンニイを連て降りてゆく。

ウオングは買物をして歸つて來てみるとファンニイの居ないのに不思議がり、ふと送食口の戸を開いて階下の聲を聞き思はず緊張し心の底から飛び上る程驚く。ファンニイの笑聲……明るいさすやうな……熱狂した……悲劇的な笑ひが全身に毆りつける樣な衝動を與へる。其處へナ・ホン・フアが來て、エン・ハイを殺して貰ひたい、やつぱり疑つてゐた通りだつた。妻のリウガエン・ハイの部屋にゐる……、ウオングは違ふと急激に叫び立ち上る處へ、ファンニイが歸つて來る。首領が出て行つた後で、つとめて平氣を裝ひ、エン・ハイを呼ぶと、ファンニイは本能的に彼が凡てを氣附いた事を知り石の如く固くなつて立つてゐる……。やがてエン・ハイがピストルをウオングに向けて這入つて來ると、ウオングは安心するが好い、生命には別條

ないから……とエンハイの手からピストルを叩き落し靜かに扉に鍵をかける、息づまるやうな情景。ウオングは戸棚から支那服を出して佛陀に禮拜し、フアンニイの幸福のために乾盃しやう、さうして立派にフアンニイは、エン・ハイに差上げやうと云ひ、而して出て行かうとする

フアンニイに、今後共影になり日向になりお前を見張つてゐる。もしこれを捨てるやうなことがあつたら……それまで、エン・ハイの生命を預けて置くと云ひ放つ。二人が出て行つた後のウオングは、今は全く自分の運命を諦め切つたやうに、氣を取り直してカルタを始めるが、その双頰に、熱い涙が傳はつて、力なき手に弄ばれるカルタがバラ〳〵と床の上に滑り落ちる

西部アメリカの支那街

（前幕より一ケ年經過）日暮前の淋しい支那街、澤山の支那の男女が右往左往してゐる。靴屋のトウ・モが路傍で歌を唄ひながら靴を直してゐる。その側で旅館兼下宿シー・シー方の料理人ヂンが無駄口を叩いてゐる。其處へ買物からシー・シーが歸つて來てたしなめ、靴屋に今朝出したあの汚い靴は昨夜たばかりの娘の靴で、それは强情な娘であの靴がなければ商賣に出ないと云ふから早く直して呉れと云つて中へ這入いる。

月が出て、禮拜堂の燈灯が輝きを增す頃、ウオングは何か尋ねる如くウロ〳〵して、一軒々家を覗き込みシー・シーの家に近寄つて凝と睨んでゐるのでシー・シーがカーテンを開けて現はれ、これを見咎める。靴屋のトウ・モは何を探してゐるのだと尋ねる。ウオングは寶石だ寶石は泥水の中に落ちても決して汚れに染まない、泥水の中へ這入つても探し出さねば置かないのだ。と云ふ。やがてシー・シーの家は夜の稼業の準備をして客を待ち受ける。親切な靴屋はウオングに、いつでも力になるから打ち明けて呉れと云ふので、ウオングは彼女との一切を打ち明け、二人共ニューヨークを逃げ出して尙且彼女を見捨てたのだ。そこで自分はアメリカに在る支那街十二三を殘らず探し廻つてゐるのだと話す。トウ・モウが急れて直しかゝつた靴をチラリと見たウオングは、感激に咽び泣きながら俺の捜してゐる娘のだ……と狂喜せん計り……。トウ・モは今にも飛び込まんとするウオングを制して、今に會はせるらと、ウオングを、暗い小路に待たせて置き、仕上げた靴を持つて行き、歸つて來て何かウオングに囁いてゐる。

間もなく右側の料理屋の中から喧嘩らしい聲が聞え、醉ひどれた一人の男が料理屋の亭主に蹴り出される。誰かと見れば、ドクター・エン・ハイです。ウオングは込み上げて來る感情を抑へて凝と樣子をみてゐる。エン・ハイは頻に靴屋に喰つてかゝり、ベラ〳〵と自分の事や、女の事を喋舌り續け、一人手に負へない女があるそれはやつぱり元の亭主が戀しいと見える、その人殺しのことばつかり云つてゐるんだ……トウ・モはそれと悟る。エン・ハイは尙も靴屋に色々と喋舌り散らしてゐる間にウオングの姿を錯覺の樣に見て驚き、先刻の家へ走り込む。やがて家々の灯火がぱつと輝くかと思ふと、フア

ンニイの横顔が現れる。トウ・モは、はやるウオングを制し、エン・ハイの這入つた家を指差して、恨みを晴らすは今だと喋し合せる。間もなくエン・ハイが注意深く四邊を見廻し乍ら出て來る。ウオングが後から斧を振上げてゐるのに氣がつかない、ファンニイの顏がくつきりと映される。ウオングは大聲でファンニイ……と叫ぶ途端、エン・ハイは振り返つておびえ切り色を失ひウオングの前に跪く。ウオングは急に思ひ直し行け！　行け!!　と去らせる。ウオングの立派な態度にトウ・モは感心して了ひ、老人の後生願ひにお慈悲深い女來樣にお祈りを上げやうと寺院の中へ這入つて行く。

ファンニイには昔の面影が更に見えない。ウオングはファンニイが唄ひ出す歌の哀調に聞き入つて、深く感動し窓の直ぐ下まで行くとファンニイは始め他の男と思ふが、その人がウオングである事を知り呆然とする。ウオングはお互ひに愛さへ變らなければ心まで汚れる筈はない海の向ふには墳墓の國が兩手を擴げて二人を待つてゐる。さあ一刻も早く行かうと、ファンニイは荷物を纏めて家を出て來る。シー・シーの家ではこれをみつけて大騷ぎとなりトング（結社）の四天王の闘士がヂリ〳〵寄つて來ますのを、ウオングは勇敢にファンニイを背後にかばい斧を手に身構へる此時寺院に巨大な佛陀の黄金像がくつきりと浮き出され、四人の聲が闇に消へて只ウオングの聲のみが「ファンニイさあお出で、もう心配しなくてもよい……。今迄の涙も苦勞も忘れて、いつまでも枯れることのない愛の泉に疲れた身體を浸して、一年前の二人になつて、佛の光に滿ちた支那の國へ歸らう」と、聞えて來る。

元の僧院の庭

ウオングは彼の生活と戀物語を、僧院長カンに長い間語り續けて來たのでした。愛は信仰であるといふ觀念から、憎むべきエン・ハイをも殺さなかつたウオングの信仰の力に和尚も首肯する。此時月光池水に映り遠くよりウオングと戀人の歌が聞えて來て次第に近づき、二人はそのまゝ月の方に向つて樂しさうに歩み去る。甘美な音樂が靜かに殘る……。

主なる配役

ナ・ホン・ファ（秘密結社首領）	井上正夫
靴屋トウ・モ	小堀誠
カン・イー（僧院長）	大矢市次郎
支那商人（一）	根本淳
支那商人（二）	高橋潤
ロン・セン・ヤ	藤田東洋
ドクター・エン・ハイ	汐見洋
リ・ホツ・ファ（乾物屋）	山田己之助
料理人ヂン	吉岡啓太郎
ユウ・チヤン（阿片商人）	喜多治郎
胡桃寶	本郷道夫
實業家谷井某料理屋主人チウエン	田邊若男
シー・シー夫人（ナ・ホン・ファの妻）	藤間房子
リ・ウ	瀧蓮子
エディス・ラツター	秋元梅子
チヤ・シユン（リホツファの妻）	玉澤七三子
スウ（ユウ・チヤンの妻）若い支那娘	山本かほる
ファンニイ・メー・ヒー（アメリカ生れの混血兒）	水谷八重子
特別出演	
ウオング（秘密結社の暗殺執行者）	早川雪洲

「富岡先生」雜話

井上正夫

暫しぶりで大阪へ行きます。本年の春、京都までは元帝劇の女優連と共に行きましたが、惜しいところで大阪の地を踏めなかつたことを甚だ遺憾に思つてゐましたが、時機到來、然も九月帝劇興行が母國初出演、大阪には初御目見得の早川雪洲君と行を共にして乘込むことの出來るのを愉快に思つてゐます。

演目も早川君は、こちらで非常な好評で天晴れ母國初出演に男を上げた。ところの「天晴れウオング」を出し、私は、國木田獨歩氏原作、眞山青果先生脚色の「富岡先生」を撰びました。

「天晴れウオング」では私は秘密結社トングの首領ナ・ホン・ファを演りますが、今現に帝劇で演つてゐるのですが、どうも此の役には弱りました。初日以來未だに弱つてゐます。大阪へ行つてもおそらくは弱り續けることでしよう。只弱つた、弱つたでは、解らないでしようか……まあ兎に角觀て下さい。只私が此の役を演つてゐて好い氣持なのは、若い、娘の樣な妻君を持つてゐることです。リウ（瀧蓮子、元築地小劇場員）と云ひますが、どうも舞臺上の妻君では仕樣がありません、現實の生活にもこんな若い妻君が持ちたいですなあ！　若い女性の方々の中に私の妻君になつてやらうといふ樣な篤志をお持ち合はせの方は有りませんかな、有れば早い者勝、大至急御申込み下さい。條件は……オット、ト、ト、こんな事を書き續けてゐたら、私は琴瑟相和し、平和な家庭を續けて來てゐる私の愛妻を、悲歎の淵に沈ましめ……。

冗談はさておき「富岡先生」は充分の自信を持つて撰び出したのです。これは故澤田正二郎君が度々演りましたが私の「富岡先生」は澤田君のよりも優れてゐると、確信を持つて斷言することが出來ます。扮裝に於ても考へた結果、澤田君の用ひなかつた長い顎髯を私はつけてゐます。讀者の中に映畫の「富岡

先生」を御覽になつた方はよくお判りのことと思ひますが、此の顎髯を附けた點だけに於ても私は作中に描かれてゐる「富岡先生」に近いものを演じ得たと自信してゐます。

國木田獨歩氏が此の原作を書かれた時、モデルがあつたそうです。二人の人間を一つの人物にしたのが此の富岡小助であると私は聞いております。一人は長州の白井小助、今一人は一寸今忘れましたが、兎に角、一九三〇年には珍らしい人物です。と云つても、現在でも此の型の人物は可成りあるだらうとは思ひます、只時代の流れと共に其の型が幾らか變化してゐるに過ぎないのです、諸君の中にも此の型の父親を持つておられる方が少くはないだらうと想像します。

可成り我儘な老爺です。自分の意思通りに娘を動かそうとして、結局は何時も失敗して一人で苦しんでゐるのです。

今度は都合で第二幕の後の方を演りませんが、演れば由一と云ふ人物が登場します。高槻春作の一子、（高槻春作は高杉晋作）です。此の人物が富岡先生の性格をよく分解してゐます。

由一　富岡さん。もう我々は維新の革命を忘れて好い時ぢやありますまいか。王政の復古は其の時代にあつて必要でしたらう。父は其の時代のために働きました。然し、今日はもう其の必要からはなれてゐる。新しき時代の前に立つてゐると思ひます。富岡さん、あなたは何時までも維新の幽靈を背中に背負つておいでなさるのです。

と云ひ、又、

由一　失禮ながら貴方は、人間としては最も美しい弱さを持つた方ぢやないかと思ひます。たゞその資質に一點、我慢づよい處がある上に、あまり父春作に愛されて維新の際地方に殘られたのと、いろいろの行掛りから脇道へそれて、そのため遂に成るべき功業をも成し得ず、同輩は侯伯たり後進は子男たり、自分は田舍の老先生たるを見、且つ思ふごとに、其の性情は益々荒れて來て、其の習ひが性となり癖となり、今日の謂ゆる富岡先生をなしたのぢやないかと思ひます。

尙又、曰く、

由一　ですから先生の心底には常に二人の人が戰つてゐます其の一人は本來自然の富岡氏です。他の一人は貴方の過去の閲歴がつくつたところの富岡先生です。そして其の富岡先生は常に猛烈に、本來自然の弱い優しい富岡氏を壓服し征伏するに馴れてゐます。お孃さんの結婚問題にせよ、又たゞ今の任命問題（維新史料編輯官）にしろ、先生の心の中の富岡氏の方は、非常に悅び承諾し希望してゐられるにも拘らず、他の一人たる富岡先生が執拗に强情に富岡氏を壓迫するために、益々心にもない偏屈な道に外れて行くのではないかと思はれます。

此の由一の言葉が富岡先生の總てを現はしてゐるのです。此

の富岡先生を私は自信を持つた上にも、最大の努力を拂つて演じます。どうか諸君、此の由一の言葉の富岡先生が私の演出によつて表現し得られてゐるかどうか、忌憚なく御批判下さい。

水谷八重子君の演る「富岡先生」のお梅と、「天晴れウオング」のファンニイとを比較すると明治四十二年と、一九三〇年がはつきり判ると思ひます。意思の無い娘と、何物にも動かされないで、自己の自由意思の動くまゝに行動する女と、時代の移りはかくまでに判然としてゐるのです。

尚、私が此の富岡先生を演るのは今度で第三回目ですが、第一、第二回の主なる配役は、第一、第二回、細川校長は花柳君第三回は伊志井君、お梅は第一回、英太郎、第二回は村田嘉久子君、第三回は水谷八重子君。大津定二郎は、梅島昇君に、柳永二郎君、それに今度は汐見洋君です。其の他は殆んど第一回以來の持ち役です。一寸御參考までに。

では忌憚なき御批評を再度お願ひして筆を擱きます。

「ギブス固煉齒磨」

本品を使用すれば幼時より老年に至る迄齒牙を完全に保つ事が出來ます

何故なれば、**ギブス**煉齒磨は刷子がとゞかぬ微細な間隙へ侵入して常に齒を美しく清潔に齒を保つ事は取りも直さず身體の健康を計るのでありますから毎日二回必ず**ギブス**煉齒磨を御用ひ遊ばせ、さすれば氣分は爽快になられます。

本品は美しきアルミニューム罐入りで桃色の固煉製でありまず有名な百貨店、藥店及化粧品店に賣つて居ります。

大形　壹個　金七拾錢　大形中味　壹個　金六拾錢　小形壹個　金四拾五錢

日本代理店　株式會社　横山商店　東區豐後町三番地

ロンドン　パリス
デイ・エンド・ダブリユー　**ギブス株式會社**

『紙風船』上演に際して

園池公功

今年になつてから岸田國士氏の戯曲を私が演出するのはこれが三度目です。第一回は東京新歌舞伎座で五月に「動員挿話」を上演しました。御承知の通り此の戯曲は守田勘彌、村田嘉久子等が初演して以來、新派等で暫々上演されてゐるので「動員挿話」の再々演には餘り作者の感激もなかつたものと見えて、一度も稽古場へは見えませんでした。

私は此の戯曲の演出に際して、アンミリ（此の言葉、判る人には判る）を誇張して見ました。勿論、馬丁友吉夫婦の反戰は戀愛至上主義的な個人主義的なものでありますが、馬丁に扮した市川八百藏君の理解と相俟つて、見物には非常にわかりよいものになりました。

一日見物に見えた岸田國士氏に、私の意圖は直ちに看破されてしまいました。何となれば、作者のねらひ處とは一寸違ふからです。でも此の場合、作者は演出者に讓歩されました。そうして歌舞伎俳優の女形が岸田氏の戯曲に登場すると云ふことは凡そ至難であることが斷定されました。

第二回は六月に東京新橋演舞場で上演した「犬は鎖に繋ぐべからず」です。出演者は新派の人々でした。此の戯曲に就いては作者が非常に自信をもつて居られたので、私は作意をそのまゝ表現することに努力しました。しかし花柳章太郎氏の扮する今里二見が素晴らしい出來であつたと云ふ外、この演出は色々の意味で失敗でした。

岸田氏の戯曲は、佛蘭西風だと云はれてゐます。事實、佛蘭西戯曲に心醉される氏の作風がその影響を受けるのは當然であります。佛蘭西には俳優で作者と演出者を兼ねてゐる人々があります。正直に云ふと岸田氏の戯曲なども矢張り御自分で演出

され、御自分で演じられるのが、(若し同氏に俳優の天分が有れば)一番よいのだと思ひます。

扨て「紙風船」でありますが、此の戯曲は同氏の初期の作品であり、或る意味に於て「古い玩具」『チロルの秋』等と共に同氏の代表的作品と云ふことが出來ます。私は「紙風船」の上演に際して、今一度作者の著書「我等の劇場」を讀み直して見ました。そうして私は作者の持つ「言葉」を飽くまでも尊重する方針を立てました。

「言葉・言葉・言葉」それは單に外形的なことだけではありません。内容的なものをも含んで居ます。

一體岸田氏の戯曲は寫實的な舞臺裝置に依つても演出出來ますが、私は同氏の戯曲を寫實舞臺に據ることは絶對に反對です今度浪花座に於ける「紙風船」演出に際して、極めて象徴的な舞臺裝置を用ひたことは、單に「富岡先生」の莊重なる舞臺裝置「天晴れウオング」の華麗な裝置を避けると云ふ意味ばかりでなく、そう云ふ處から來てゐるのです。

「紙風船」の妻に扮する水谷八重子孃は、岸田氏の「驟雨」や「葉櫻」等、暫々上演して好評を博した人、又夫に扮する伊志井寛君は嘗て新劇協會時代に少なくとも數ケ月は岸田國士氏の薫陶を受けた人、演出者としても最も望ましい配役と云ふ可きでせう。

全く岸田氏の戯曲だけは、幾ら演出者が汗みどろになつた處で、俳優にその人を得なかつたら、何の効果も擧りますまい。

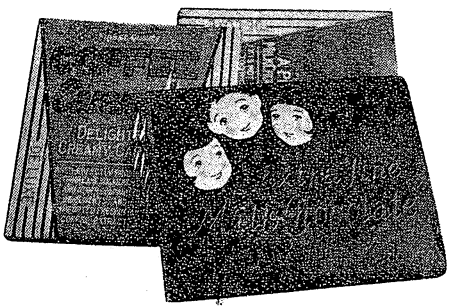
(「富岡先生」の稽古がすみました。今度は私の番です――九月二十四日・東京帝國劇場樂屋稽古場にて)

アングロス井ス

ミルクチヨコレート

コーヒキャラメル

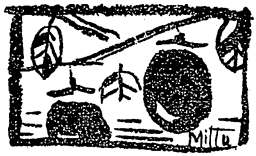
チヨコレート キャラメル



發賣元 株式會社 横山商店

大阪市東區豐後町三番地

電話東(94)〈一六六一 二〇一三番



浪花座出演に際して

水谷八重子

久しぶりで道頓堀に出して頂く事となりました。嬉しい事に存じます。

×

私が大阪が好きなのは、たゞに御友達の多い、懐しい土地であるばかりでなく、大阪と云ふ土地が……その御客様方が……新しい藝術を受け入れて、それをよく成育せしめると云つた趣があるのも大變嬉しいので御座います。

×

私がほんの子供のとき、まだ藝術座の子役時代……最初に私の爲に大きな催をして下さつたのは、大阪の方々でした。藝術座再興の際も大阪では特に大變な御歡迎を受けました。

飛行機で參りましたとき、舟乘込……それらも私に取つては忘られぬ思出で御座います。

×

米國に渡航して、芝居や映畫を見學し彼地の名優がたと親しく御交際する事の出來る因緣を作つて下さつたのも、御當地の關西映畫會の御懇情でございました。

×

こんなことで、大阪とわたくしとの間には東京にもまさる親しみが深いので、私としては何れの土地よりも、感謝と愛慕の氣持が大變濃厚なのでございます。

御世辭や御座なりではございません、全く心からさう思つて居るので御座います。

×

特に今回は、いつもの寶塚行が變更されて久しぶりの道頓堀出演となりましたし、一座の方は私の小さいときから、いろいろ御世話になつて居る井上先生を初め、それに早川雪洲さん、汐見洋さん、藤間房子さんなど、全然從來とは一變した珍らし

い座組で御座いますので、演ります當人としては氣が換つて大變に緊張も致しますし、淸新な氣持で舞臺に立つ事の出來ますのは、何よりも嬉しいので御座います。

×

ウオングは先日來東京で演じましたその儘で御座いますが、東京で花柳さんのおやりになつたエンバイを汐見さんが演つて下さるのは、また大變に興味が深いと存じます。

汐見さんは私の少女時代、研究座でいつも御一緒に演じました方で、男性なら竹馬の友と云ふやうな關係で、例の私の當り狂言と云はれて居ります「毆られるあいつ」の「あいつ」は汐見さんでした。藝術座再興當時、私どもは實演を願つたときの事です。それ以來久しく一座致至しませんでしたが今回偶然にも舞臺を共にすることになりましたのは御懷しくもあり大變に嬉しいことに存じます。

×

早川さんともニューヨークで御目にかゝつて御世話になりましたのが、御緣のはじめで、此回同上舞臺に立つ悅を重ねましたのは誠に仕合と存じます。大變に舞臺の熱心な、着實な力なので、私なんか可なり御敎を受ける事が多いと存じます。全然新派の演き方と違いますが、それだけに、その以前の新劇時代を思出させる懷しさが御座います。

×

「富岡先生」のお梅も「紙風船」の妻も、私がこれまで演つたさうに見えまして、實は初役なのでございます。

つまり私にとりましては今後の浪花座が、また私の勉强する敎場となる譯で御座います。

申すまでもなく、役者は日常の研究でございますが、特に私などのやうに、年少でもあり、ふつゝかなものに取りましては一に研究、二に研究なのでございますから、出來るだけ勉强に勉强を重ね、努力精勵するのが何よりと存じます。そしてその研究なり勉强なりを自由にさせて頂くのが、何よりも何を頂くよりも嬉しいので御座います。

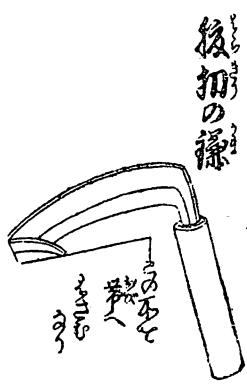
×

この點で今回の出演は三種とも私の勉强の對象として大變にありがたいと存じて居ります。

どうぞ、私を御覽下さいます方々は、どうぞこの私の勉强ぶりの可否を見て頂きたいと存じます。藝が巧とか拙いとか、綺麗だとか、醜いとか、そんな事は、私にとつては本意ではございません、眞摯に眞劍に緊張した勉强をして居るかどうか、その邊をどうぞ、御觀賞下さる樣に願います。

×

久しぶりで大阪に參りました御挨拶がトンダ勝手な御願となりました。相も變らぬ手前勝手どうぞあしからず御許し下さいますやうに……。（浪花座にて）



文樂の人形を語る

西尾福三郎

日本の古美術を愛好する人達は、中でも特に彫刻の類に就ては、法隆寺と奈良博物館の事を知らない人は無いであらう。

私は常々法隆寺と奈良博物館には人一倍の憧憬を抱き乍ら、それを訪ね探る事は何となく躊躇し勝ちになるのである。

だから、精々年に一度か、或は二年に一度位の割で稀に出掛て行く折はあるが、その他の期會には、幾ら近所へ行つたついでがあつても滅多に訪ねた事はない。

卑近な例であるが、御馳走を絶えず口にしてゐると、それがやがては珍味でも何でもなくなつてしまふのと同じ譯で、珍らしい物や貴重な物は、稀に味つてこそその感激に醉ふ事はできるが、これに狎れてしまへば段々價値感が稀薄になつてくるものだ。いや、これは斷じて價値感が稀薄になるのではなくつて實は漸々に感情が整理されると共に、其處から本當の認識が湧き出す事になつてくるのであるが……

文樂座の人形に就いても同じやうな事が云へると思ふ。

所詮、今日の文樂が或方面からヤイ〳〵云はれると云ふ原因の一つは、確かにこの珍らしいと云ふ一點に有るのではなからうか。大阪人よりも東京人に、更に日本人よりも外國人にと云ふ風に。

日本に一つしか存在しないと云ふ事が既に大きな絶對的價値である。だから、法隆寺が日本佛教最初の飛鳥藝術を代表してゐると云ふ點で殆んど唯一であつて、よく流行るのと同じ意味で、毎月文樂座に集る人々は、古臭い歌舞伎や義太夫に隨喜渇仰する善男善女であらう。彼等はこの日本唯一と云ふ事と、同時に最古と云ふ點に特に魅力を感じてゐる次第である。この氣持は、掘出し物や珍品獨專の快に浸らうとする或種の人々の骨董を愛好するあの心理に似てゐるやうである。

奈良博物館は、法隆寺寶物の出開帳によつて、特に偉い人氣

を集めてゐる。その人氣は、恰度文樂座の巨頭の誰れ彼れが一門だけを引連れて古巢を拔け、地方巡業に出かけた時のやうなものであらう。所が最近の噂によると、その奈良博物館内のピカ一百濟觀音が古巢の法隆寺へ引取られて、金堂の中で壁畫等と一緒に展觀されるやうになつたと云ふ話だ、こうなると將に法隆寺藝術のオールスターキャストである。恰も今月の文樂座の膳立てのやうなものだ。

今月は地方興行に出てゐた人々が新涼と共に元の古巢へ立戻つて、茲に新しく勢揃ひして、全座員總出の盛觀を呈しやうとしてゐる。

不人氣の澎胚たる世間風の中で、茲獨り好況の成績を誇つてゐる文樂座は今將に黃金時代の絕頂である。

こうしてゐる内に、やがて人々の好奇心が充され、物珍らしさが飽和された後に、初めて眞の文樂座の價値が輝き出すであらう。日本佛敎を本當に理解しない人に法隆寺藝術の眞味が分らない。義太夫を本當に味へない人に文樂座の藝術は分らないだから、西洋人や東京その他の地方人よりも、竹本義太夫を生みそして育て上げた大阪人が一番文樂座の價値をよく知つてゐる筈だ。古美術の話でこの文を書き初めたのだから、同じく古美術の話でこの章を終つておかう。

我國の肖像彫刻が飛鳥天平平安鎌倉と榮へて、鎌倉の末期あたりから藝術品としての美點を殆んど失つてしまつた。

その時、これに代つて表れたのが能面の彫刻である。が、能面も僅に一少期を支配した許りで下り坂になると、今度はそれに取つて代つたのは實に操り芝居の人形の製作だつたのである。

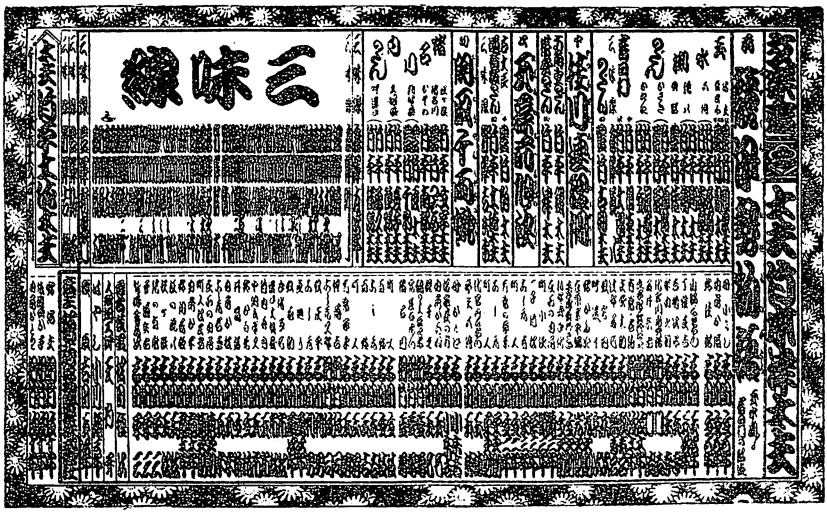
或人の研究によると、操りの人形は、既に能樂が生れたより以前から存在してゐたとさえ云つてゐる。だから何方にしても我國の肖像彫刻の歷史は、中古の佛像から離れて能面や操り人形の方へより多く傳はつてゐると見る事ができる。

尠くとも、人間の魂を搏つ所の美の力は、室町以後の佛像よりも、却つて能面や人形首の方に遙かに强く表現されてゐる。

昔の大德僧が靈夢を感得して造り上げた佛像の精神が、時を隔て、伊豆の住人夜叉王に傳はると、其處に修禪寺物語にみるやうな藝術家氣質が表れてくる。文樂座の人形に初めてガラス眼を入れて目玉を動かせる工風を考へ出した人形師天狗久は今尙阿波の町に生きてゐる。彼は水野派の骨相學を習得して、それによつて色々樣々の性格を人形の顏面に描き出さうとしてゐる。

深夜文樂座の人形部屋では、偶人がヒソ〳〵と囁き交すと云ふやうな怪談めいた話は今だにきく所であるが、これ等は作者の精神力がそのまゝ人形の體に傳はつてゐる證據であると見る事ができる。

ともあれ、文學として、又音曲として文樂を味ふ事以外に、彫塑としても實に立派な價値を備へた人形であると云ふ事を私は强調しておきたいのである。



玉藻前旭袂

右大臣道春館の段

中（鶴澤重造）豐竹駒太夫
切（野澤吉兵衛）竹本土佐太夫

人形

鷲塚金藤治　吉田榮三
采女之助　吉田玉幸
後室萩の方　吉田小兵吉
娘桂姫　吉田文五郎
娘初花姫　吉田扇太郎
中納言重久　吉田玉市
腰元　大ぜい

〻、早夕陽も傾きて、無常を告つぐる鐘の音も、いとゞ淋しき黄昏や、間毎を照らす銀燭の、光燦ゆき廣書院。程も有らせず入來る鷲塚金藤治秀國、素袍の肩肘いかつ氣に、上座にこそは押直る。斯と知らせに館の後室、衣紋正しく出迎ひ。詞御上使樣には御苦勞千萬、皇子樣より御諚の趣仰せ聞けられ下さりませと、辭讓の詞に一揖し。詞上意の次第餘りの儀にあらず、皇子樣豫々御所望有し獅子王の劔、今日中に差上ぐるか、左無くば娘桂姫が首討つて渡さるゝか二つに一つの御返答サ、只今仰せ聞けられよ。ハアコハ存じがけ無き御難題、其の劔は紛失致し、所々方々と尋ねれども、今にい於て行き方知れず今暫しの御容赦を。アイヤ夫りや成らぬ、皇子御心を掛られし桂姫、度々催促有ると雖も、兎や角と言ひ延ばし、打捨て置かるゝ事、貴族の威勢鈍きに似たりと以つての外御憤り劔が無くば桂姫、首にして御渡し成されと、退引爲せぬ釘鑓。胸にひつしと萩の方、途方涙に暮れ給ふ。後に始終

桂姫の、此方の間には初花が忍んで樣子立聞くとも知らず御壐は涙を拂ひ。とても手詰に成る上は孰れ逃れぬ娘の命、未練の申す事ながら、一通り聞いて給へ。詞過去り給ふ夫道春夫婦の中に子なき憂ひ清水の邊なる、三神の社へ立願込め三七日の參籠、其歸るさに產子の泣き聲、肌に添へしは雌龍の鍬形、由緒有る人の胤ならん、神の御告げと連れ歸り、育て上しは桂姫、間も無く設けしアノ初花、右と左に月花と、詠め暮せし姉妹を、是非に一人は無い命、殺さにや成らぬ品と成り、せめて夫が在ますば、間談合を有らう物、何と言ふても身を悔やみたる御涙、止め兼てぞ見えけるが、思案極めて顏を上げ、杖柱とも思ふ姉妹勝り劣りは無けれど、詞劍で殺さば三神への恐れと言ひ、殊に義理有る姉妹、爰の道理を汲み分けて、妹の初花を代りに立て給はらば、此上も無き御情と、云はせも果も聲荒げ。詞ムスリヤ三神の咎めは恐れ、神の御末の皇子の仰せ御用ゐは成れぬか、よし夫は兎も有れ上意を受た某に、身代り抔とは思ひも寄らず無益の問答聞く耳持たぬ、サア只今と詰寄つていつかな撓ぬ其願色。叶はぬ所と胸を据え。イヤのう御上使、武士は物哀れを知ると言ふ、自らが一つの願ひはコレ此双六盤、二人の命を天道の指圖に任せ、負たる方の首を討たば、せめては夫を定業と、諦めらる、事も有る、何卒此儀御了簡を、コレ慈悲じや、情じや聞分けてと、義理と恩愛二筋に、傳ふ涙は雨や小雨、身に振掛る桂姫、母の情の有難さ、御慈悲と云ふも口籠る、振の袂に白雨の、晴間は更に見えざりき。詞エ、樣々のよまひごと、見物爲るもまどろしけれど、ハテ何と爲う是非が無い、サきり〳〵とお始め成れ、が勝負が付くが直に寂滅ヲ、成程々々、夫と明さば女氣の、歎きに心搖き曇り、取亂しては詮も無し、只餘所ながら暇乞ひ、一思ひにと云ひさして。詞泣々取出す合用意の褥、四隅には冷泉立る樒の一本も露を待つ間や蜉蝣の哀れ果敢なき有樣を、几帳の影に采女之助、斯る難儀も我故と、思へど出るにも出られぬ時宜、千々に心を苦しめる。思ひは同じ母親が、是が冥途の使かと、思へどいとど急き上す、胸は子故の五月闇、文目も分らぬ曇り聲。詞娘々と呼出す、アイト返事も一樣に、斯とは誰も白小袖、死出の晴着と姉妹が、姿も對の雪柳、萎れ出たる屠所の道、羊の歩みたど〳〵と、最後の坐にぞ押直る。一目見るより秋の方、扨は樣子を聞しかと、先を取られて今更に、兎角答も涙なる母の歎きに搖き曇る、心は月の桂姫、漸々に顏を上げ。詞委細の樣子は先刻にから、殘らず聞いてをりました。嘶放れし時鳥、子で子に有らぬ自らを、此年月の御養育、未だ其上に妹まで、自らを助けんと、樣々の心遣ひ、思ひ廻せば廻す程。空恐ろしい身の冥加胸に迫つて一言も、御禮は口へは出ぬわいなア、斯樣憂目を見せますも、皆自らが徒らから、とても叶はぬ戀合故と、覺悟は決て居りました、露塵御愚を送りも爲さず、先立ます る不孝の罪、御赦し成されて下されませ。詞產の父上母樣は、何處に何して在るやら、命の際に只一目、逢ふて死度い、是ばつかりがと言ひさして、聲雲らせば初花姫、なう曲も無い其お詞、縱令何の胤なりとも、妾が爲には大事の姉樣、御前は殺さぬ自らを、イヤ妾と、死を爭ひし姉妹の、心根不愍と母親は何れを其と分兼る、胸は泪の三瀨川身も浮くばかり歎きしや、左にあらぬ體になう娘

詞御上使への御馳走に日頃手練の双六を、お目に掛きや、一世一度の晴業なれば二人ともに大事に掛け、何方も負て給んなやと、割ては云はぬ親心、傍の盤を引寄せて、是が此世の別れかと、思へば直ず手も撓く、斯かる例も綾錦、合袋の紐も疾々と、合蹇の河原を此世から、合積も石敷も姉妹の、年も重目に持つ涙、互に筒を取交し、指手引手も端で成らず、合切つ切られつ修羅道の、苦しみ受んの悲しやと、思へば筒も手も戰ひ、亂矢もどろの石使ひ、姉をかばへば妹を、助けん物と雙方が、重一一六五二四三、果し無ければ氣を苛ち詞エ、ぐづ〳〵と埒の明ぬ長詮義、早く勝負を付召され。早く〳〵と鷲塚が、迫みみ立つれば姉妹も、爰ぞ一生懸命と、心盡しの盤の面、母は胸まで突つ掛くる、涙呑み込み〳〵て、背ける顔に露時雨、乞目を振し姉よりも、妹が心の嬉しさ苦しさ。サア〳〵姉樣が御勝ち成されたと、首指延べて覺悟の體見るに母親保ち兼ねわつとばかりに泣沈む。刀すらりと金藤治。詞勝負は見えた觀念と、閃めく雷光姉姫の、首は前にぞ落にける。ノウ悲しやと、初花姫、敢なき身體に取付いて悲歎の涙果しなく、泣目を拂ひ袂の方、上使の側に詰寄つて。詞ヤア狼狽たか金藤治、勝負に勝た姉娘、何故切つた何故殺した、夫と悟つて身代りと、初花が志し、水の泡と成つたのも皆其方が無得心、謀られたか口惜いと、身を戰はして腹立ち涙。上見ぬ鷲塚せゝら笑ひ。詞ハ、、、、しやら臭い咎め立て、勝負に勝たふが勝まいが、仰せを受た桂姫、首討たが何誤り、皇子のお心背く、旁、悪く身動き召さるゝと、何奴此奴の用捨は致さぬ退込んでお居遣れと、檻威を甲に傍若無人。振袖引裂首押包み、睨み散らして立出る。御蜜は赫と急上げ給ひ。詞ヤア、過言なり金藤治、女と思ひ侮つての雑言無禮、右大臣道春が妻其處動くなと裾引上げ、長押の長刀追取つて石突丁と庭の面、八双三段水車合母樣是は何事と、止め隔つる初花姫、邪覺仕遣んと突退け刎退け、掬ふ長刀閃りと返し、詞ヤア猪口才な腕立と、首を傍に鷲塚が、祕術を盡す上段下段、合運の極めが金藤治、肩先四五寸切下られ、思はず跡へたず〳〵。付入双胸蹴落され、是はと駈寄る御蜜の弱腰どうと打付け動かせず、采女是にと飛んで出で、抜く手も見せず鷲塚が、脇腹ぐつと突込む白刃、急所の痛手にどつかと座す。起しも立ず聲荒らげ。皇子に諂い悪事を勸め、人を損ふ獄卒め、思ひ知れやと刀の柄、抉る腕首確乎と押ひ。ヤレ待て采女逸まるな。詞言ひ殘す仔細有り。詞ヤア此期に及んで何言譯、血迷ふたか金藤治、イヤ血迷ひもせず、後れもせぬ、先づ暫くと押止め、苦しき息を弗と次ぎ。詞元某は東國武士、下野の國那須野の何某、故有つて所領に放れ當所に立越し漂よふ中、女房が初産、産下したは女の子、流涙の身の悲しさ、雌龍の鍬形相添へて、五條坂の邊に捨て置きしが程無く妻も世を去りて、愛年月を送りし内、思はず皇子の見出しに預り當家に傳はる獅子王の劍、盜取つて得爲せば、一廉の侍に取立んとの賴み、ハ、ア畏まつたと忍び入り、奪ひ取つたはコレ此鷲塚。ホ、御驚きは御尤も、然に目が暮れ悪人の皇子に從ひ積悪無道、斯程邪見の心にも忘れ難きは恩愛の、捨てし娘は如何にぞと、案じ煩ふ折も折詞最前御蜜の御物語、聞いた時の其嬉しさ、肉身のお子に代、かばひ給はるお慈悲心、有難しとも嬉しともなんと詞の

有るべきぞ、須彌より高き御高恩、萬が一も報ぜずして、知らぬ事とは云ひながら、お家に仇する人で無し、讐へ鬼畜の身にもせよ、初花姫の御首に何と刃が當られう、御手に掛つて相果つるは、せめて、心の云ひ譯ぞと先非を悔ゆる身の懺悔。扨はとばかり母娘、采女之助立寄つて。詞ム、シテ御劍は御邊が所持爲らるゝか。アヽイヤ、獅子王の御劍丙侍所諸ともに皇子の館に隱し有れば、術を以て取返されよ。サア斯く物語れば劍の盜賊、何れも立寄つて、成敗召されよと、透迤々々首取上げ。詞コリヤ娘、コリヤ釜じやわやい、釜じやわやい、何故物言ふては呉れぬぞと、眠れる如き死に顔を、打守り打守り、今端に成つて二親を、焦れ慕ふた心根が、いぢらしいやら不愍なやら、其時名乘るは安けれども恩義の二字に搦まれて、ぢつと答ゆる辛抱は「熱鐵を呑む心地ぞや、燒野の雉子夜の鶴、子を憐れまぬは無しと聞く、可惜者を胴慾に、首打落し手柄顔、慾い親じやと冥途から、怨み、事の可愛やと、我を忘れし男泣き、心を察し萩の方文も涙に正體無く合一樹の影の雨宿り、一河の流れを汲む人も、深い緣と聞く物を、藥の上から育て上げ、手しほに掛た親じや者、可愛う無うて何とせう、十七年の春秋が、一期の夢で有つたかと返らぬ事を口說合立託ち給へば初花も、俱に涙に咽返り詞眞に夕べも今朝までも斯うした理由が有らふとは神ならぬ身の情無い、何ぼ捨ても子じや無いか、何故自らを切らなんだ、今から誰とついまつや、琴の復習や十種香、手向けの種と成つたかと、聲も惜まず叫び泣き。采女も遺愛着の、義理の柳恩愛の、血筋の別れ鷺塚が鬼を欺く兩眼の、迸る涙霧々々、四人が涙一時に、落て流るゝ袖の海、膝は淵爲す如く也斯かる折しも勅使と呼ばゝる聲諸とも、中納言重之卿、衣冠正しく入給へば。思ひ掛無く人々は、敬ひ請じ奉る。重之優美の御聲にて。詞曾比禁廷にて歌合せの折から、息女初花姫より差上られし詠歌、みさび江に、底の玉藻は亂るとも、知らるな人に深き心をと有しを、帝叡感斜ならず、御賞美の餘り、女官の列に相加へ、玉藻の前と改めて、召連來るべしとの勅諚。ヤア〳〵仕丁ども、言付たる品早く持て。アッと答へて白臺に、更衣の裝束恭しく、御前に差出せばはつと親子は有難涙、辭するは恐れと母親が、取々合着する五ツ衣合綾羅錦繡緋の袴、芙蓉の顏色婀娜女の、四邊燦き其新粧ひ、采女之助は突つ立上り詞我は是より姫が首、皇子の館へ持參して虛實を以て御劍を、奪ひ返し奉らん、早御去らばと立出る。コレなう暫しと母親が、頭に名殘の稱名は、直に黃泉の道標。合道の案内と鷺塚が刃を拔けばかつくりと脆くも枯る芭蕉葉の、露の玉藻も潤ふ袖、絞り、合兼たる朝日の袴、雲井の御所や九重の、大内山へと、三重へ別れ行く。

B級蹶起の秋

野球が裏付ける自信

俵藤丈夫

茶の間のラヂオのラッパから、騒音を破つてブウーと吼えるやうなサイレンがうなる、續いてワーッと凄まじい喊聲——今日の第二回戰も、遂に新鋭法政の勝利に歸して、永年の强剛明大は連敗の憂目を見たのだ。何といふ番狂はせ。これでリーグ戰も愈よ面白くなつてきた。さらぬだに、常勝軍慶應が既に立教の强襲に一敗を喫し、次いで明治が帝大に優勝され、早稻田又法政に第一戰をマンマとやられる。俄然B級チーム帝法立三大學の奮起は、相次ぐ番狂せの接戰にこの秋のシーズンをいやが上にも熱狂せしめる。

私もまた、一個の野球ファンとして殊の外興味深く、今秋のリーグ戰を樂しんでゐる。否、私に於いてこそ、その興味は他人へ百倍するのである。

永年雌伏せるB級の躍進、これほど痛快なことは、蓋し私にとつては、最近に稀しいことである。

と言つて私は、A級たる早慶明にも、又B級たる帝法立にも何等學閥的關係を有しない、が、しかし、常に因習や門閥や、名聲や傳統や、さうした無意味なカムフラージの爲に常に分外の利得を贏ち得てる社會のA級階級と、之なきがために折角の實力も認められず、臥薪嘗膽天の一方を望んで躍動精進の苦闘を續ける社會のB級階級との不當な闘争に美奮を禁じ得ない者なるか故にである。

私はこれを劇壇に見る。

私自身の經營する更生新國劇は、正に劇界のB級に屬する。私の一座には、一人の菊五郎氏がない、一人の羽左衛門氏がない、一人の猿之助氏がない、伊井氏がない、河合氏がない。何處に一點の傳統も、名聲も、門閥もない。唯だ二三新劇壇の者

宿を揃へた外は、實に名もない少壯俳優の結束である。早の小川も、慶の宮武も超弩的名聲者は勿論一人もゐないのである。たゞ一つ「新國劇」といふ看板はあつても、これすらも、もとは名もなき無名の青年俳優の故澤田正二郎が自力苦闘の賜であり、しかもその人は既に此世にないのである。實に現在の新國劇こそ、東京の一流劇場に、又大阪道頓堀の大グラウンドに現る劇團中、最も因習的名聲に惠まれざる一團であつて、それは正しく、神宮球場における帝大法政立敎級である。

だが、私は常に信ずる。最後の勝利を得るものは、決してさうした空漠な虛名ではない。

力だ、熱だ、奮闘だ、努力だ！

私は常にさうした信念を以つて凡ゆる事物に向つてゐる。そして、好きな野球に於いても、これを見るに、この心を失はない。早慶明の覇果していつまで持續さるべきや？ 帝法立の三軍、果して花咲く春に遇はずして終るべきや？ これが私のリーグ野球を見る第一の興味であつた。

が、果然！ 私の信念は的中し始めた。見よ、この秋B軍の奮闘である。

「幾ら帝大の高橋がいゝと言つても、何うだリーグ戰へ出りや駄目だらう」

かうした聲は、去る春のシーズンを通じての聲であつた。だが春は奮はなかつた高橋投手は、遂に猛然奮起して健棒明大を完全に屠つたではないか。

鈴木(茂)然り、細岡、辻又然りである。

要するに最後は實力である。名聲や傳統の强味は短夜の夢である。

だが夢はある程度まで人生を左右し支配する。この迷夢を撃破して、自ら實力を發揮せんとするには3對2程度の實力では駄目ではある4對2、5對2——倍數以上の實力を示さなければ及ばないのである。

さりとて私は今の新國劇に對して、決して過當の自惚をもつ者ではない、だが、幸ひに私等の新國劇一座は、常にたゆみない精進と努力と、コンクリートの如き團結力を以つて、一路向上の躍進をつゞけてやまない。一生懸命、捨身の奮闘——何かして劇壇のA級に肉迫し强襲せんかの意氣をゆるめず、專心舞臺を勵んでゐる。

この熱と力は、必ずや觀客の胸を突いて因習的虛名以上の、もつと〳〵强い實質をもつて迫らずにおかないことを信ずる。

故澤田座長を見よ！ さうだ、何よりもこれほどたしかな生き證據はない。

奮闘せよB級！ A級だつて神ではない。力次第で破れるのだ。勝てるのだ。(五・九・二八)

無題斷想

竹田敏彦

また大阪の道頓堀だ。

何かしら、故郷へ歸るやうな氣がする。私は日本中で、實は一番道頓堀が好きだ。學校を出るとからすぐ、大阪で十三年間新聞記者の生活をつゞけた私には、青年時代の微笑ましい。また恥かしい追憶は、大抵道頓堀から出發してゐる。

それだけに、道頓堀へ出ることは、嬉しくもあり、氣も張る狂言にも苦心する。これは個人的な感情だが、率いて劇團の仕事にも影響してくる譯だ、悪い影響はないから諒としてもらひたい。

○

そこで上演の狂言だが、第一に野口浩氏の「南部戰線に躍る」といふ支那劇を選んだ。軒並びの浪花座の「ウオング」に殊更構へるやうにヘンに考へ過ごされては困る。そんな氣持は毛頭ない、たいこの戯曲が、最近新國劇が得たうちでの最上の作品だから出したに止まる。支那現下の動亂、憑玉祥、將介白二將軍の對峙を背景に、上海の耽樂街の闇に活躍する青年妻まじいスパイのローマンスは中心とし、鬼薊の花のやうな妖艶な毒婦夕空の星の如き可憐な乙女等を配し、賣春窟を出し、上海阜頭の夜の暗を描き、戰場を現し、陣營を配し、銃火の響、反戰の叫び、悲戀、哀歌、決闘、興味實に百パーセントの現代劇である。作者野口氏は過般中央公論社がなした文藝著書募集に當選した唯一の戯曲作者で、近頃賣出しの新人である。

○

中幕の作者長谷川伸氏、二番目の行友李風氏は今更喋々するまでもない。今や日本の劇壇は「長谷川伸時代」を現出してゐるし、故澤田座長在世中行友氏の作にして當らざる作はなかつた。劇評界の權威三宅周太郎氏は常に氏を榎本貞彦以後の舞臺技巧者と絶賞してゐる。「國定」「月形」「新撰組」皆然りである

が、私はわけて、この「間新六」が好きだ。新進の若手の大熱演で又變つた舞臺を見せること、信ずる。

○

狂言の手前味噌はこれくらひにし、御批判は見ての後に承るとしやう。

それよりも、私が去る五月、大阪興行で感じたことは、大阪觀客の持つ、一種の心意氣であつた。去年四月故座長の死後、初めて追悼公演を浪花座でやつた時には、實に淋しい成績だつた。東京帝劇に於ける前月の興行の大滿員と比べて、私は何となく恨めしいほどの氣持にさへなつた。處が、其後私共が一年の苦闘を凌ぎ忍んで、この五月來阪した時には、何うだ、あの大入だ。そこで私はつくづく感じた。大阪の人々は、親に死なれたからといつて泣いて行つたのでは相手にしない。健氣にその跡をついで碎骨碎身努力奮闘をして見せてこそ、初めて「親が死んでも、あんなに一生懸命にやつてゐる。感心なことだ、何とかしてやろやないか」と、かう出るのだ。空虛な涙ぐらいでは動かない、大阪人を動かすものは、努力と奮闘である。大阪人の一種の心意氣として、私は膝をうつて感心した。決してこれはお世辭ではない。

どうかこの大阪から見放されないやうに、一生懸命の努力を怠つてはならない。

（三頁よりのつゞき）

は忘れることは出來ません。たしかその興行は、九月だつたと思ひます。薩摩上布？　の白を着込んだ舞臺顔の魅惑には、男ながらも惚れ〳〵とさせられたものです。今度は季節柄白などは避けるでせう。――權太の辨慶縞とも衝く關係！……。

×

中車の三五兵衛と共に綴切りの見せ場「三五大切」の三味線の技巧は、五瓶の機智を偲ばせて兩優の達引、必らずや近來の大芝居だらうと思ひます。脚本價値は何うの、歌舞伎の生命は減却して行くのと、神經衰弱的な議論はやめよ！――さうして先づ傳統と洗練と暢達との「藝術」を見よ!!　更に百數十年前の昔に斯うした稠密なデザイン（構想）を舞臺に活躍せしめた名作者のあることを知ることは何んと愉快ではありませんかたゞ焦燥な現代生活に喘えぎきれないでゐる私達にしても、せめては秋の一日を豊かな歌舞伎情調に浸つて我々祖先が殘して呉れた屈托のない「心の故郷」に歸つて見ようぢやありませんか――。（五・一〇・一）

新國劇十種の内

間新六

三幕四場

―十月の角座―

1

播州赤穂の城主淺野内匠頭長矩が、江戸城に於て、勅使饗應の半、公家吉良上野介義央を傷つけたのは元祿十四年の春――「所謂松の廊下の刃傷事件」として餘りにも有名である。

一家離散――

そうして唯、大石良雄を主謀とする一味は、忠臣忠義の眞を盡すために、續々江戸に出府して、敵上野介の動靜を探つてゐたのだ。

時、十五年霜月半。

2

吉良家でははしたない出入の者にもひたすら用心の眼を配つてゐる。それでも安心ならないと見えて、これが防止策が重臣たちの間に論議された。

そうして、赤穂藩士を見知つた人間を召抱えることが取定められた。この内命が仲間頭の權六に下つたのは、間もなくであつた。權六に何故その内命を下つたか――それは近頃、仲間部屋へ出入する新助といふ渡り物に目星をつけて居たからだつた。

新助――彼は間新六と云ふ立派な赤穂藩士だつたが、内匠頭からは御勘氣、父兄からは勘當され、流れ〳〵この江戸に出て、博奕三昧のならずものとなつてゐるのだ。

その新六には武士道はなかつた。

酒、女、博奕、に唯その日〳〵を送つてゐるに過ぎない。だから、主家の滅亡にも、一藩の瓦解にも、無關心であつたのだ。

權六はそうした新六の素性を知つてゐたから、堤重のお瀧――新助の情婦――を利用して、吉良家へ、如何にしても彼を召抱えやうとあせるのだ。

――俺は武士道を捨てた男、この俺には赤穂に恩も仇もねえ人間だ、だから昔の友達が、何をしやうと、それに加勢も邪魔もしたくない！

――この、この俺の生きる世界は酒だ、博奕だ！

本心でか酒の上でか、彼はそう云ひ續ける。

この密談を窺ひ聞いてゐたのは、吉良家の小林平八郎――新助が、お瀧と共に歸つた後、權六に何事かを囁やく……。

已に、その頃この屋敷には倉橋傳助が酒屋となり、杉野十平次が八百屋となつて内情をさぐつてゐるのだつた。

部屋頭権六
小川虎之助

3

更けた夜――此處は兩國横網河岸。

したゝか呻つた酒に、千鳥足で歩んで行く男――それは間新六。

刹那！

富森助右衛門
金井謹之助

四邊りの闇から躍りかゝつた吉良家召抱への武藝者數名！

新助酒に醉ひ痺れてるとは言へ、美事な腕前、襲ひかゝる白刃を決然、撥き返し苦もなく、突き殺す――。

そして、酒の醉ひのためにか其場に打伏し水をくれ、水をくれと、怒號し續ける。

丁度、其處へ通り合したのは、離散した淺野家の藩士、富森助右衛門、竹林唯七、神崎興五郎、寺坂吉右衛門の四人。

彼等は復讐の大望を打ちあけるが、新六の胸には、何の感激も湧かない。

――身も魂も仲間になつたこの新六にそんなことは用もないこと……

と、冷然たる言葉。

四人は憤怒に駆られて、その刃を抜き放つ！

この時、お瀧が提燈を下げて、其場へ來合すのだつた。

瞬間富森が一刀のもとにその灯を斬り落した。

雙方――闇のなかに無氣味な對立！

更けた夜に水音――夜番の拍子木が遠くかすかに……。

按摩道哉
実は間毒兵衛
中井哲

4

あはたゞしい年の暮。

元淺野家の萩原兵助も浪々の後、この江戸に出て、かたくるしい大小を捨てゝ、今は質店を開いてゐるのだつた。

今宵はその新宅祝ひ。

この席に連らなつたものゝなかに、安井彦右衛門、そうして間新六。

宴酣の頃。

彦右衛門の倅寅之進が驅けこんで來た。

——大石殿一味には復讐の企てがございます拙者も……拙者もその一味に加りたいと頼みましたが、父の不忠が災はひして、拒絶されました。

寅之進の言葉に一座は白けきつた。

間もなく忠義一徹な寅之進は別室に於て、まことの心を書き殘して哀れにも自殺する。

そのすべてを知つた間新六の胸には血が、武士の血がたぎり初めたのである。

5

新六の侘住居では、お瀧が彼の歸るのを待つてゐる。

彼女の眼は——二三日前からかすんでゐたが遂に、その夕暮には黑白も判らず、全くの盲目。

それを案じてゐる彼女。

新六に捨てられはしまいか——そればかりが案じられてならないのだ。

新六は酒にも醉ふことが出來ず歸つて來た。

そうして、戸口で拾つたものは小さな紙片。

——寒菊や文箱に添えし九寸五分。

その紙に一句書殘してゐたのは、炭賣にやつした木村岡右衛門だつたのだ。

先刻の萩原屋の出來事と言ひ、その一句と言ひ、新六は胸をさゝれるやうな思ひ。

——不思議な力が腹の底から湧いてくる！

と、呟く。

その折、この寒空に街を流して行く按摩。それは誰あらう新六の實父——間宮兵衛で、療治に事寄せ、一味の大望、愈せまり、今夜・相生町の小豆屋に無盡の講がある。

暗に一味の大事を語つて歸つて行く。

この恩愛の情に彼の心は動いた。

——俺は、俺は武士の血を享け、その血に依つて育くまれた人間だ！。

魂までも欺くことは出來ない、武士として武士として生きなければならない。

飜然——

目醒めた間新六。

お瀧も悲しい別れの盃を交す。

折柄、遠くに黑江町の九つの鐘。

——南無三ツ！

業物を腰にすると新六は素足の儘一散走り。

夜空からは吹雪が……

哀れにもお瀧はその雪のなかにたつて、見えない眼で、何時までも〳〵も新六を見送つてゐるのだつた……。

大阪市東成區鶴橋南之町一丁目

桃谷印刷株式會社

電話天王寺(77)二六七〇番
二六七一番

十一日　松竹座に十一日より上映された「日本南極探險」は白瀨中尉南極探險以來二十年目の紀念上映で、中尉は、十一日午前九時梅田着、この度の紀念上映に當り、當時の懷古談を試みるための來阪。

十三日　道頓堀唯一の松竹蒲田及び下加茂映畫の封切場である朝日座は、過般來修築中だつたが工事竣成して、十三日は板圍ひを撤回、愈よ十五日より花々しく開館、東洋趣味を多分に取り入れた新裝館は、諸設備に萬全を期し、換氣通風暖房冷凉裝置は斷然道頓堀各座を凌いでゐる。

十四日　新任大阪府警察部長として此程來阪した大竹部長が、河野高等課長同伴にて文樂座見物。『教化材料としても非常に秀れたものだ』と激賞した。

十八日　新裝朝日座の開館に際し十五日より二十一日まで蒲田下加茂兩撮影所から花形連が陸續來阪、交代出演で挨拶をやつたが、十八日は東京蒲田軍の花岡菊子、高田稔、川崎弘子、毛利輝夫、關時男、小藤田正一、坂本武等梅田着。

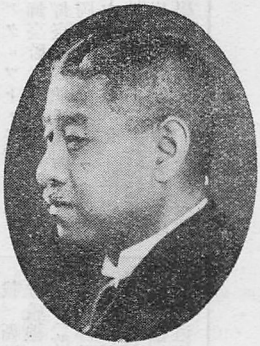
ユース

二十五日　世界統計會議員文樂座招待會にて二十餘ケ國の外國貴顯は我が國古典藝術の粹を滿喫した。

二十六日　中座十月興行に出演、當り狂言の『經ケ島』の清盛、及び純上方狂言『春花五大力』の三五兵衛で力演して居る市川中車は、廿六日夜富士號で來阪

二十九日　演劇、映畫を今日まで趣味として觀て來た財界人が、突如松竹王國の人となつて、これから實際に參與し大いに斯界のためにつくすといふ劇界ニュース——關西にその人ありと知られてゐる實業家井上周氏が、松竹土地建物興業株式會社の重役會の決議に依り此度第三期決算アケを待つて、相談役に就任した。

二十九日　角座十月興行開演中の新國劇一派は、廿九日夜大擧來阪、一座は梅田驛から二十餘臺の自動車に分乘して市内目ぬきの場所を廻り花々しい乘り込みを行つた。



劇壇往來

東西大歌舞伎

十月興行

——中座——

四日初日
毎日午後一時開幕

【狂言】一番目、榎本虎彦作「經島娘生贄」三幕・中幕「義經千本櫻」すしやの場・所作事「連獅子」長唄囃子連中・二番目、並木五瓶の原作によつて南北しぐむ「春花五大力」三幕松田種次舞臺裝置

【配役】小松内府重盛、いがみの權太、勝彌助實ハ三位中將惟盛、藝者菊野(福助)狂言師左近實ハ兒獅子の精、千鳥大太郎(長三郎)中老磯浪、權太女房木仙、法華僧蓮臺、女房お咲(吉三郎)邦綱北の方雲井の前、仲居お千代(駒之助)越中次郎盛次(成笑)女房綾浪、漁師岩右衛門、梶原の郎黨 成三郎、漁師仲藏、仲居おきく(雀)上總之助忠清、安松伊平太(扇)琵琶法師光月、藝者お德(鴈之助)漁師女房おいそ、藝者房野(我久之助)女房藤卷、藝者小糸(我久三郎)難波次郎經遠、磯谷仲左衛門(升藏)舞妓まつ代(敏夫)法橋娘小枝、若葉内侍、富田屋お市(魁車)舞妓お鹿(章景)舘太郎近國、料理人喜兵衛 奥山)町人太郎吉(中三郎)仲居お吉(三津之丞)所化雲念、藝者早枝(魁童)梶原の郎黨(松壽)燒物師九郎藏、梶原の郎黨八阪の五郎太(市昇)漁師梶六、梶原の郎黨亭主重兵衛(齋五郎)岩上大六、市塚左十郎(九圓次)阿波民部太夫、村の役人、廻し男彌助(箱登羅)唐傘法橋實ハ石和八郎、親彌左衛門(市藏)平相國淨海入道、笹野三五兵衛(中車)平宗盛、娘お里(我童)息女明石の前、娘渚(成太郎)淨土僧遍念、政治郎)小山田別當有重、若黨八右衛門、壽三郎)富小路忠光(ひとし)彌左衛門女房お米、家主仁兵衛、喜集院喜平太(大吉)主馬判官盛久、狂言師右近實は親獅子の精、出岩宅右衛門(三津五郎)

早川雲洲特別出演

井上正夫
水谷八重子
久々共演

十月興行

——浪花座——

一日初日・毎夕四時開演

【狂言】第一、國木田獨歩原作、眞山青果脚色「富岡先生」三幕七場繁岡鑒一舞臺裝置、第二、岸田國士作、圓池公功舞臺監督「紙風船」一幕薄拙太郎舞臺裝置、第三、ダウイット・ベラスマ・アクメット・アブダラ原作長田秀雄譯並に舞臺監督「天晴れウオング」三幕遠山靜雄舞臺裝置並に照明

【主なる配役】富岡小助ナ・ホン・フウ(秘密結社首領)(井上)侯爵江藤卓文、靴屋トゥ・モ(小堀)下男倉藏・カン・イー(僧院長)(大矢)小學校長細川繁、夫(伊志井)村長關澤達之助(大東)法學士高山文助、リ・ホツ・ファア(乾物商)(山田)秘書官戸谷常造、料理人ヂン(吉岡)某省次官石岡淳平、石工宇源次、ユウ・チャン(阿片商人)(喜多)職工民造、胡桃賣(本郷)通行の男(寺島)某新聞社長福田健二(宮島)實業家谷井某、料理屋主人チウエン(田邊)大津の友人、支那商人根本)黑田の番頭、支那商人(高橋)ロン・セン・ヤ(藤田)法學士大津定二郎・ドクター・エンハイ(汐見)富岡の姉娘お種、シー・シー夫人(藤間)村の娘、リウ(ナ・ホン・フウの妻)(瀧)清松夫人ちか子・エデイス、ラツター(秋元)チヤ、シュン(リ、ホツ、ファの妻)(玉澤)村の娘・スウ(ユウ・チャンの妻)若い支那娘(山本)富岡の妹娘お梅、妻、ファンニイ・メー・ヒー(アメリカ生れの混血兒)(水谷)ツオング(秘密結社の暗殺執行者)(早川)

新國劇

秋季第一回公演

——角座——

十月一日初日
晝十二時
夜五時半二回開演

【狂言】第一、野口浩作(サンデー毎日所載)轟瀧太郎演出、青木齊一郎舞臺裝置「南方戰線に躍る」三幕五場、第二、長谷川伸作、(改造十月號所載)竹田敏彥演出、濱田右二郎裝置「五文叫き」一幕、第三行友李風作、小堀雄舞臺監督「新國劇十種の內間新六」三幕四場

【配役】中井(司令馮玉祥、劍客梁川庄八郎按摩道龍實は間喜六)野村(苦山半兵衛、安

井樂齋）金井（頭目馬錫贊、山本長右衞門實は富森助右衞門）南（苦力陳有石、門番惣兵衞）島田（青年王鶴人、八百屋金五郎實は杉野十平太）丸茂（王の從者孟伯五、門弟甚太郎、安井寅之進）畑中（苦力丁萬民、劍士矢柄段右衞門）秋月（苦力孫一平、魚屋虎松、酒屋手代倉橋傳助）小川（士官吳任德、伯樂、部屋頭權六）伊藤（馮玉祥副官、劍士穴倉同心齋、中小姓天野貞之進）雄島（伯樂仲間伊八）辰巳（苦力由朋奎、間新六）高木（孫良誠門弟熊吉、小林平八郎）鈴木（宋哲元、門弟權七、建部喜六）久松（賣春婦、姚小寶、提重のお瀧）山路（何玉鳳、隣の女房お倉）二葉（春賣婦鄒星朋、鳥井の娘お陸）永島（張金齡、町の娘、捉裏のお國）初瀨（揚小秋、妻折江、召使お仲）

十月本格興行

——文樂座——

一日初日

毎日午後三時開幕

【狂言】前、古靱太夫が初役にて十五年振の上演「競伊勢物語」**玉水淵の段より春日村の段まで**、中津太夫十年振上演の名曲「桂川連理柵」**六角堂より帶屋内の段まで**次土佐太夫の罷曲十年振の上演「玉藻前曦袂」**道春館の段**、切若手連掛合の發剌興味溢る「關取千兩幟」**猪名川内の段**

【役劇】前競伊勢物語玉水淵のだん、毎日役替にて、信夫（和泉太夫、豆四郎（鴫太夫）五作（長尾太夫、貴鳳太夫）鐃八（町太夫、鏡太夫）典膳（綾太夫）おさき（源路太夫、富太夫）おたに（浪花太夫、文太夫）糸（國六、歌助）春日村のだん中（相生太夫）糸（叶、猿糸）次（大隅太夫）糸（道八）切（古靱太夫）糸（清六）琴（團二郎、福太郎）中、桂川連理柵六角堂のだん（鐃太夫、新左衞門、帶屋内の段、切、津太夫、友治郎）次、玉藻前曦袂、右大臣道春館の段、中（駒太夫、重造）切（土佐太夫、吉兵衞）切、關取千兩幟猪名川（つばめのだん、鐵ヶ嶽、文字太夫）猪名川（つばめ太夫）おとわ（南部太夫）北野屋、辰太夫、千駒太夫）大阪屋、長子太夫、陸路太夫）呼遣ひ（龜久太夫、播路太夫）糸（吉彌、勝平、勝市）胡弓（小庄、友駒、勝芳、吉貞）

【人形劇】文字摺買おさき（文之助）同おたに（紋太郎）磯の上豆四郎、政龜）娘信夫（紋十郎）鉦の鐃八（玉松、代官川島典膳、門造）同家來、大ぜい）亭主五作（玉德）春日村のだん、紀の有常（榮三）母およし（文五郎）磯の上豆四郎（政龜）娘信夫（紋十郎）鉦の鐃八玉松）在原業平郷、光之助）井筒姫（文作）代官川島典膳（門造）同家來、大ぜい）有常の家來（紋太郎）在所の女（覺三郎）同（傳之助）六角堂の段、女房おきぬ、文五郎）弟儀兵衞（榮三）丁雅長吉（玉次郎）帶屋内の段、親半才（玉七）母おとせ（小兵吉）弟儀兵衞（榮三）兄長右衞門（政龜）女房おきぬ（文五郎）丁雅長吉（玉次郎）信濃屋お半（紋十郎）道春館のだん、鷲塚金藤次（榮三）采女之助（玉幸）萩の方（小兵吉）娘桂娘（文五郎）娘初花姫（扇太郎）中納言重久（玉市）腰元（大ぜい）猪名川内のだん、女房おとせ（紋十郎）猪名川（政龜）鐵ヶ嶽（玉松）大阪屋（市松）北野屋（文之助）呼遣ひ（兵次）

高橋義信、五月信子

近代座一派

——樂天地——

九月三十日初日

晝夜二回開演

【狂言】第一、村田和緒作「捕吏の家」二場藤井亞木良舞臺裝置、第二、瀨川春郎作「謎の死骸」六場

【配役と連名】藝妓千代香（五月）田川泰男（原）私立探偵上田誠（大倉）お房の内緣の夫疋田重三（玉川）石黑剛一（中村）囚人猪之松泰男の兄泰造（山田）猪之松の父源兵衞、千代香の母お勝（滿喜）同心近松彌十郎、堂守魯宗（朝香）囚人梶原、佐藤幸平、不良團長山岡（井田）金貸剛右衞門狸の巣主人愼兵衞（龍田）目明し仙之助、不良青年甲村、客大山（南條）囚人虎松、醫師吉川、客山本（廊布）囚人龜公、料理番留吉、不良青年岡田（有馬）猪之松妹お絹、藝妓市松（村田）猪之松悴鐵太郎、半玉若松（月汕）近所の女房お仙、藝妓小染、門附おもよ（中村）藝妓小笑（森）女囚C、藝妓小園（大月）女囚B小松家女中お定（三輪）女囚お松、銀月の女將お房（山口）村の娘（月村）村の娘、仲居おきよ（丘）村の娘、半玉德松（月）女囚A、藝妓松壽（月橋）女囚お花、女乞食おさよ、愼兵衞女房おたき（富士川）女囚お千代、石黑の娘綾子（小松）宗平と呼ぶ男（高橋）

編輯後記

中座の初日が四日になつて、寫眞の編輯が餘儀なく遲れた、ために發行が例月より二三日遲くなつた事を先づお詫びいたします。

×

然し、內容の充實といふ點では、大いに誇かなものがあります。

中座の東西合同、浪花座の早川雪洲特別出演に、水谷、井上等の合同劇、角座の新國劇、文樂は、一座總額合せで本格興行等々、本年下半期に於て最初の緊張を呈し、ために、何れも殊玉の原稿が寄せられました。

悠々六十頁、その量よりも、其の質に於ては、正に特輯號の感があると思ひます。

×

特輯號で思ひ出したが、本誌も愈々來月（十一月）號は創刊五十輯目だ——によつて、創刊五十輯記念號として、大いに活躍して見たいと、目下その具體案を考究して居ます。

×

次號は讀者諸士の御期待を仰ぐと同時に、本誌に御惠稿下さる諸先生の特別の御援助を今からお願ひする次第です。

住田冬和

昭和五年十月一日發行
雜誌『道頓堀』第五年第四十九輯

◇誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◇郵勞代用は一割增にて御註文を願ひます。
◇御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所
大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢（郵費稅共）

昭和五年九月三十日印刷
昭和五年十月一日發行
大阪市南區久左衞門町八番地
松竹土地建物興業株式會社
編輯兼發行者 鳥江銑也
大阪市東成區鴫野南之町一丁目
印刷者 北島竹次郎
大阪市東成區鴫野南之町二丁目
印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衞門町八番地
發行所 松竹土地建物興業株式會社
道頓堀編輯部
電南〔二二四〇番〕〔六六六五番〕

婦人の便秘に

婦人は種々な原因の爲に便秘を起し易く便秘者は絶えず頭痛、眩暈、嘔心、腹部緊張鼓腸等を起し不愉快なるは勿論身体に悪影響を與へるものなり、故に便秘ある婦人はラキサトールを用ひて便通を調節すべし。

下劑

ラキサトール

粉末錠劑、全國藥店にあり

大阪市東區道修町
發賣元 株式會社 淺野義商店
東京市日本橋區岩附町

L.O.116.

昭和二年十月廿五日第三種郵便物認可
昭和五年九月三十日印刷
昭和五年十月一日發行

第五年十月號

一部金參拾錢

アレ日ヤケ止に一番よい

美貌ムーリクブラク

國富增進

國產愛用

美と氣品を添へる

粉白ブラク